野村政夫戯曲集

二宮尊徳

912.6-N95ウ
1200500757185
912.6
95

始

912.6
N95

野村政夫著

戲曲集

一

宮尊德

株式會社
章華社版

昭和六年四月十日

911
83

序にかへて

紀念すべき皇紀二六〇〇年の秋、こゝにさゝやかな私の書き下ろし戯曲集を世に贈る。

新しい意味の史劇五篇と、そして小品的なラヂオ・ドラマ三篇とをおさめた。私としては、この作品集に精一杯の力と愛とを傾けて梓にのせたものである。大方の御批判と、よりよき御指示を切望して止まない。

尙、前半五篇の史劇は大劇場用の上演作品としての意圖の元に舞臺的構成をしたものであるが、現今、國民の健全なる思想及び娯樂を助長する意味で、文部省あたりの理解ある後援によつて、都市農村の全國的にわたつ

て、清純な「素人劇團」があとから〳〵創立され、かなり活潑な運動が開始されつゝあるのは、日本演劇道の爲に誠に悅ぶべきことであると思ふ。同時に、この私の戲曲集におさめた作品が、それらの新しい劇團の上演脚本として用ひられることになれば、大いなる幸ひである。汎く活用されることを祈つてゐる。

——序にかへて、こゝに一文を認む——

皇紀二六〇〇年　秋

著者識

——目　次——

一　二宮尊德（三幕）……（三）
二　源平鎌倉記（三幕）……（八九）
三　柳亭種彥（三幕）……（一八三）
四　浪人と若夫婦（五場）……（二五三）
五　薩摩潟の月（一幕）……（三〇七）
六　三條烏丸夜話（ラヂオドラマ）……（三四一）
七　信長と僧無邊（ラヂオドラマ）……（三六九）
八　觀音寺綺譚（ラヂオドラマ）……（三九一）
あとがき……（四一五）

二宮尊德

（三幕）

序幕　野州櫻町陣屋門前
同陣屋内、尊徳の居間

二幕目　常州青木村、名主勘右衞門の家
村内、茅野原と化せし耕地の一部

大詰　青木村北端、櫻川の堤上
櫻川の堰

人物　二宮尊徳（野州、櫻町陣屋主席）
妻、　なみ
横山司右平（宇津家、家臣）
豐田正作（櫻町陣屋勤番）
物井村岸右衛門
東沼村專右衛門
横田村忠右衛門
館野勘右衛門（常州、青木村名主）
大和田山城（同　神主）
無頼漢寸七
——その他、村の男女、人足など多勢。

序幕

（一）

野州櫻町陣屋門前。舞臺正面上手寄りに門、その左脇に方九尺の番所あり。門内奥正面の玄關は、同じく門内の右手より築出たる土手上塀の爲に、僅かに、玄關板敷の左端に附いた番所しか見えず。その番所の窓側より、葭塀が斜に左方へずつと通り、母屋の裏手を隠す。葭塀の彼方には梅の古木など見ゆ。

門の左右兩翼には、長屋窓があり、左端は竹生垣にて、そこについて曲る道見ゆ。その邊一帶、目の届く限り、冬枯れの田なり。

時は、天保二年十二月の或日の午後——

（上手より、野良のかへりらしい、子供づれの百姓夫婦出る。夫はその背に枯草の束を山と積

み女房は、片手に土瓶、鎌などを下げ、片手にて、小犬を抱きたる幼い娘の手を引く。三人、陣屋の門前へかゝる時、立停りて、一禮する。女房は娘の頭に手をそへて、お辭儀させ、さて打過ぎんとする時、門内玄關に當り、何やら人々の言ひ爭ふが如き氣配す。夫婦暫時不審さうに顔見合はせる。併し、そのまゝ下手へ通りゆく。この時、竹生垣横の道より、物井村の百姓、岸右衛門急ぎ足でくる。手には澤山の草鞋を持つ）

女　房。おや、そこへくるのは、下の岸右衛門さんぢや有りませんか。

夫。　やあ、ほんに岸右衛門さんだ。おういゝ、岸右衛門さん。

岸右衛門。これは〳〵、上の與五兵衛さんと夫婦か。

幼い娘。小父ちやん、今日わ。

岸右衛門。ホオ、おみよ坊かい。今日わ。いゝ子〳〵。はつはゝゝ。

夫。　大さう急いでゐるぢやないか。どこへ。

岸右衛門。何ね、陣屋の二宮先生樣ぢやないが、今日は朝から村廻りさ。實はこれからお前さんの家へも廻るつもりでゐたんだが、こゝで會つて、おいらも大助かりと言ふものだ。おかみさん、手塞げになつて厄介だらうが、どうか、これを持つていつて下さいな。

（草鞋二足分引抜いて渡す）

女　房。まあ、この草鞋を、ですか。

岸右衛門。はゝゝ、どこにでもある物だが、ま、おいらの心持だ。笑はずに取つておいておくんなさいよ。

女　房。濟みませんねえ。でも折角かうして丹誠してお拵へになつたものを……

岸右衛門。いやなにさ、閑な時でもたゞのらくら遊んでゐては今日樣に申譯ねえと思つて、皆に穿いて貰はうと、毎日少しづゝ作り貯めては、村の衆へ配つてゐるもんだな。遠慮なしに取つておいて貰ひてえのさ。

（泌々と）變りなすつたなう。——お前さん、ほんに、變りなすつたのう。

夫。

岸右衛門。そ、そんなに言つてくれると、おいらどうやら、極り惡くなつちまはあ。よしてくれよ。（赤くなり、首筋など撫でる）

女　房。いえ、ほんにさ、昔の貴方を知つてゐる人は、誰だつて、皆驚いてゐるんですよ。新田の茂多作さんとこのお婆さんなど、貴方のことを、鬼が佛になつたなんて、ホ、、始終噂してゐますのさ。

岸右衛門。おいらがの、今日、幾らかでも人間らしくなつたとしたら、それは皆二宮先生樣のお蔭だよ。（回想的に）酒と博奕と喧嘩に夜も日もなく、どこへ行つても毛蟲のやうに厭がられ、爪彈きされてゐたおいらを、當時、この櫻町陣屋へいらして間もない先生樣が、蔭になり日向になり、庇つて下すつた。敎へ諭して下すつた。（涙ぐむ）與五さん、早いものだなう。もう彼此……十年になるぜ。

夫。さうよなう。飢饉騷動も、今ぢや遠い昔話になつてしまつたが、あの頃は、村々の耕地といふ耕地は、どこもかしこもカラ〳〵に乾上つてしまひ、飢ゑ疲れた俺達は、覺えてゐるか、土まで食つたぢやないか。そのドン底から、長い間、それも色々など苦勞を忍びながら、今のやうに、立派な村に仕上げて下された二宮先生樣のご恩を思ふにつけ……俺達は有難くて、勿體なくて、かうして何不自由なく働いてゐるのが、いつそ、氣が咎めてならない位よ。

（この時、村人、陣屋へ向つて低頭し、岸右衛門らに挨拶して通る）

岸右衛門。や、これはとんだ長話をしちまつた。どれ、この草鞋を先生樣へもお納めして、それからもう一廻りしてこやう。ぢやあ、これでご免を蒙りますよ。

夫。　さうかい。では何れ又なう。夜分でも、ちと話しにおいでなさいよ。

岸右衛門。はい、有難う。

女　房。さやうなら。

（岸右衛門、夫婦が去るのを暫時見送り、それから陣屋門前へ急ぐ。その時門内より、簡單な旅支度の三十恰好の男――常州青木村名主勘右衛門――が、陣屋の下僕常吉、國三、それから勤番の役人豐田正作等に、門外へ押出されてくる。岸右衛門驚き、番所の脇へ身を避けて、眺め居る）

常　吉。えゝ、おめえも聞分けのねえ人だ。先生様は、今日も朝から村見廻りにおいでなすつて、お留守だと言つたら、お留守なんだ。

勘右衛門。（反抗的に）ですから、そりやもう、よく判つたと先刻にから申してゐるでは有りませんか。

圓　三。なんでえ、なんでえ、そんなら素直に歸つたらいゝぢやねえか。

勘右衛門。いえ、私は、先生にお目通り出來ぬ以上、おめ〳〵とこの儘村へ戻れぬ譯があるのです。どうか、先生のお歸りになる迄、お玄關の端なりと拜借さして下さいましな。

豐　田。くどい男だ。それは困ると、最前よりあれ程申してをるではないか。例へ名主であらうと何であらうと、他村の者を故もなく通しておいては、吾々の落度となる。

勘右衛門。ご迷惑はかけませぬ。決して貴方様方にご迷惑はかけませぬ。先生のお歸りまで、どうか、お願ひでございます、待たしてやつて下さいまし。

豐　田。常州青木村名主、勘右衛門と申したな。――拙者は、暫く小田原の藩へ戻つてをつたので、事情はよくは知らぬが、其方は以前にも、其方の村の領主川副殿の添書など持參し、再三、先生にお目通り願つたさうだが、何故か許されなかつたと言ふではないか。

圓　三。さうなんですよ、豐田様。來る毎に追返してゐるんです。そのくせ、かうして性も凝もなく、執拗く押掛けてくるんですからね。おい〳〵名主さん。惡い事は言はねえ、痛い目を見ねえ内に、とつとと退散しな。

常　吉。それによ、幾らがんばつてゐたつて、どうせ、先生様は會つちや下さりやしねえよ。

勘右衛門。でもございませうが、今日といふ今日は、私も青木村一ケ村三十戸の人々の生命を、この兩肩に擔つて、もうこれが最后のお願ひにまゐつたのです。皆さん、どうか御慈悲でございます。お玄關先でお邪魔でしたら、このご門脇でも結構です。先生のお歸り迄見てお見ぬふりでおいて下さいまし。

常　吉。玄關先だつてご門脇だつて、ならねえと言つたら、ならねえのだ。さあ歸れ。歸れ歸れ。

岸右衛門。（見かねて、出る）待つてくれ、常吉さん。

常　吉。おや？　おゝ、なんだ。おめえは物井村の岸右衛門さんぢやねえか。何の用だい。

岸右衛門。様子はすつかり此處で聽いてゐたが……この方がご門脇で先生様のお歸りを待つ分には、別に豐田様やお前さん方に支障はないと思ふがね。

常　吉。何の事かと思つたら。だが、そりやさうはならねえのだ。俺はこのご門脇の番所を預る身だ。おめえ、お役向の事に、餘計な口はきかねえでくんな。

岸右衛門。勘右衛門さんとやら。先生様はな、人々の悦びとなり、幸せとなる事なら、ご自分はどんな辛い思ひをなさつても、屹度、屹度力を貸して下さるお方だ。まして、お前様の村中の人々の生死にもかゝはらうと言ふ大事を、お斷りになる筈がないのだがなう。

（不審氣に首を傾け、考へ苦しむ）

圓　三。（花道の彼方をを指し、突然黄い聲をあげる）やあ、あそこへ先生様達が歸つてゐらしたぞ。

豐　田。おゝ、ほんにぢや。お歸りだ。それ／／名主、見苦しいぞ。ずつと退つてをれ。

常　吉。ずつと／／。やい／／、もつと遠くへ退つてゐろ。

（常吉、勘右衛門を突飛ばす。勘右衛門は蹌いて尻餅をつく。岸右衛門走り寄つて、勘右衛門を助け起し、何か口の中で言ひ言ひ、埃などはたいてやる。軈て花道より、木綿の羽織に袴、手甲脚袴草鞋がけといふ扮裝にて、當時櫻町陣屋主席なる尊德二宮金次郎出る。あとに尊德の門下、櫻町管下三ケ村の領主宇津家の家臣横山司右平及び東沼村の專右衛門、横田村の忠右衛門など附き從ふ）

圓　三。皆様、お歸りなさいまし。

豐　田。（進み出で）先生、お寒い中をご苦勞様に存じます。

尊　德。（機嫌よく）いやなに。それに今日は思ひの外早く廻り仕舞つたのでな。（振返り）横山。それから專右衛門も忠右衛門も、さぞ疲れたであらう。早く足を洗つて座敷へ上れ。そしてなみに頼んでな、あたゝかいものなと拵へて貰ふたがよい。

專右衛門。はい／／有難う存じます。先生様にもどうぞ早く、お寛ぎなすつて下さいまし。

忠右衛門。何分にも、つひ先程迄、眼もあいてゐられぬあの空ッ風、いやもう腹の底まで冷え込んでしまひました。

横　山。吾等は兎もあれ、先生が、お風邪でも召してはと、それのみ心配致し致し、歩いてを

りました。

尊　徳。なに〳〵。わしの體は生れ落ちるからして、つめたい風や雨に曝して鍛え上げてきてをるで。横山のやうに、お坊さん育ちの病弱者ではないよ。そなたの方こそ、又、熱でも出しはせぬかと、いたく心を痛めたわ。（話が途絶えぬ爲、出端を失って、もぢ〳〵してゐる勘右衛門へ、ちらりと眼を遣り、そのまゝ、門内の方へ進まふとする）

勘右衛門。先生。先生。（轉び出て、尊徳の袴の裾へすがる）青木村の勘右衛門でございます。また〳〵お願ひに罷り出ましてございます。

尊　徳。（冷く）——今日は、お前一人か。

勘右衛門。はい。實は今日といふ今日は、私は、決死の覺悟で出てまゐつたのでございます。先生、二宮先生、どうぞ、どうぞ青木村を、救つて下さいまし。お願ひでございます。

尊　徳。その事なら、わしは、前の時にも、その前の時にも、堅く斷つた筈だ。

勘右衛門。（必死に）なれど、どうぞお聽き下さいまし。私共の村も、この十二月に入りまして、いよ〳〵どん詰りのどん詰りまで追込まれまして、はい、このまゝにしてをりました

なら、一ケ村の人々は餓死するより外に道はございませぬ。昨日とても隣の重病の老人が、飢じさの餘り、一面に茅野原と化りました耕地へ、有りもせぬと判つた草の根を探しに這ひ出て、そのまゝ、そのまゝ息絶えて死にました。又、雨風の洩る、名ばかりの屋根の下で、この寒空に、裸の身をお互に抱合つて暖をとりながら、落窪んだ眼ばかりをギョロ〳〵させ、聲をかけても、まるで阿呆のやうに通じなくなつた者もをります。先生。私は、もうこれ以上、この狀態を手を束ねて眺めてゐる譯にはまゐりませぬ。今日といふ今日、私のこの命をかけて、お願ひに上つたのでございます。どうぞ、青木村更生の仕法を、力を、私共にお與え下さいまし。（地にひれ伏し、懇願する）

尊　徳。——お前も知つての通り、本年の初め方より、氣候は甚だ不順、夏に至るも陰雲四方を塞ぎ、日の光を仰ぐことも稀であつた。從つて秋に入れば五穀の實はすこぶる惡く、日本全國何れの土地を見渡しても村々は衰微し、飢に泣く農民の數のみ多い。名主、世の中に不幸なのは、お前の村ばかりではないぞ。折角ながら、わしはお前の申出を容れる譯にはいかぬ。——それに前の時にも申し聞かせた筈だが、わしは、主君大久

保俟の命によつて、當櫻町管下三ケ村の興復の事に從ひ、それだけで手一杯といふ有様なのだ。これ以上他方へ手を出せば、肝腎の地元の復興はそれだけ遲れるといふ事になるではないか。そこも考へて貰はなくては困る。

勘右衛門。ご尤もでございます。併し、私村の人々が起つ力も全く失せて死を待つばかりの今日、それを救ひ、それに希望と光明を與え得るのは、廣いこの世の中に先生をおいて外にはございませぬ。先生が青木村更生の仕法にお乘り出し下さいますれば、村方一同の者は新しい明日への希望をふるひ起し、今一度強く生きやうとする力が湧き上つてくるのでございます。先生、お情でございます。どうか、多くの人間の生命を救けると思召しまして、お力をそへて下さいまし。この通りでございます。はい、この通りでございます。

（尊德答えず。風出る。遠い野面から田圃を渡つて鳴つてくる。人々、思はず寒さに身を縮める）

勘右衛門。（にじり寄り）それに先生が只今仰せられましたご當地の起返しは、最早完成されてをるやうに見受けられますが。實は私、こゝへまゐる途中もご當地村方の狀態を見てまゐりましたが、川水堀、川堰、道路と何一つとして至らぬ所もなく完備してをります し、民情も、東沼村、横田村、物井村と、何れへまゐりましても、家々の土間や軒下には米俵がどつしりと積込まれ、飢も寒さも知らぬ氣に、春を待つばかりの長閑な有様。先生、その百分の一、千分の一でもの幸せを、私共の村へもお惠み下さいまし。

尊德。成程、他所には、豐かに見えるかも知れぬ。櫻町三ケ村起返しの大業は、この豫定の十ケ年間で略完成の域に達したには違ひないが、それは決して永劫不變の完成ではない。わしらは現在迄を一期とし、來春早々から第二期の仕法に入つて、全き完成に向つて努力しやうと思つてをるのだ。併し名主、よく聽くがよい。例へばこの櫻町三ケ村の興復が、今日こゝまで成つた功蹟は、ひとりわしの仕法にあるのではないぞ。いくらわしの仕法が勝れてをつても、それだけで荒廢した耕地や穀物の實る譯はない。――つまりは、わしの仕法を信じ、わしの仕法を活かし、小利を捨てゝ大道に就き一致協力して努力を續けてきた三ケ村村方一同の働きの結果だ。人々の意氣だ。人

々の和合の賜物だ。なう、どうだ、判つたか。

勘右衛門。は、はい。

尊　徳。判つたなら、このまゝ立戻るがよい。

勘右衛門。えッ。そ、それは……

尊　徳。わしは忙しい體ゆゑ、これで失禮する。

勘右衛門。あつ先生！　お待ち下さいまし！　少々お待ち下さいまし！　先生。

（尊徳、勘右衛門の悲痛な叫びを背に受流し、そのまゝ足を速めて門内へ入る。それに必死に追縋らうとする勘右衛門を、横合より常吉躍り倒す。岸右衛門、門脇に茫然と立つたまゝ、併し懐疑的な眼で、尊徳の後姿をぢつと見送つてゐる）

（二）

陣屋内、尊徳の居間。上手は八疊の座敷、下手は十疊の本間にて、正面に床の間あり。

（兩の座敷は襖にて仕切らる）縁側は兩の座敷をめぐりて鍵の手なりに下手へのび、その突當りは八疊の上の間への板戸となり、（觀客席よりは上の間の窓と戸袋のみ見ゆ）本間の後方に隣した三の間に竹縁あり、その前方は土庭となる。土庭の彼方には板縁を控へて下僕部屋あり。

上の間の戸袋と平行に土手上塀が下手へのび、その下手端に柴折扉のつきたる出入口あり。そこより玄關板敷前の砂利道へ通行出來る。（即ち土手上塀越しに、玄關の右横、屋根見える）

庭は、その下手の土手上塀の所より、上手へかけてずつと廣く舞臺前面迄迫り、上手は土手上柵となつてゐる。

母屋の彼方後方には、板塀斜に通り、その盡きたる所に土藏の白壁見ゆ。

（庭にては、下僕佐吉丈八の二人が、舞臺の上下に分れて、夫々手に竹箒熊手を持ち、丹念に庭を掃いて居る。本間にては尊徳、妻なみの手傳で袴など除り、着替をしてゐる。下に横山司右

平と專右衛門が坐す。上手の居間の方では、尊德の長男彌太郎が忠右衛門を相手に、凧の糸目を直すに忙しく、幼い妹のふみは、羽子板を抱えたまゝ、その傍に立ち、無心に兄や忠右衛門の仕草を眺めて居る）

專右衛門。先生樣。先程の私村の芳三のことでございますが、さう致しましたら、いつ陣屋へ伴れてまゐつたら宜しうございませう。

尊　德。さうだな。今日でもよい。櫻飯でも馳走するからと言ふて、何氣なく伴れてくるのだぞ。

專右衛門。畏りましてございます。――併し、あの芳三といふ男は、決して根からの惡人ではないのでございますが、どうして又、盜みなど致す氣になりましたやら……

尊　德。つまりは、このわしが至らぬからだ。中風の老父と盲の母親、加えて女房子供まで抱えて、四苦八苦のあの暮向だ。わしは、芳三の盜みを責める前に、あゝした一家のあつたことに、氣付かずにゐた自分の迂濶さを責めなくてはならぬ。わしは、芳三に復興資金を貸與えてやらうと思ふてをる。（橫山の方へ）なう橫山。そなたはよく、わしの廻村を日々では大へん故、三日に一度、五日に一度にしたらよろしからうなどと申すが、毎日廻村してをつてさへ、どうだ、かうした大きな見落しがあるではないか。

橫　山。恐れ入ります。つひ先生のご健康のみを氣遣つてをりますために……

尊　德。その志は、よく判つてゐる。有難く思つてゐる。併し、わしは、この土地へ一家を擧げて赴任してきたその時から、わしの一身は、この土地の興復の爲に捧げやうと堅く心に誓つてをるのだ。雨の日も風の日も、一日も缺かさず廻村してをるのは、村役人としての一片の義理でやつてをるのではない。と言ふて、別に又村人達の怠惰を戒める爲の示威でもない。つまりはわしの信念を實行してをるに過ぎない。唯々、自らの務としてこれを行つてをるだけに過ぎない。

橫　山。……はい。

尊　德。時に、これ〳〵なみ。

な　み。はい。

尊　徳。雜炊の方はどうしたな。まだ出來ぬのか。

な　み。只今、おとしときんが、一生懸命に拵えてゐる最中でございます。もう間もなく出來上りませう。

尊　徳。なるべく早くしてくれ。皆も腹が冷え切つてをるからな。

な　み。畏りました。ではちよつと見てまゐりませう。（去る）

横　山。左樣か。別に――

尊　徳。餘り寒い中を、わしについて歩いたので、ほんたうに冷え込んでしまつたのではないか。

横　山。いや。

尊　徳。併し、大分疲れてをるやうだ。そなたは病弱である故、つとめて大切にしなければならぬ。

横　山。有難う存じますが、實は先程より、物を考へてゐたりしますもので。別に疲れてもゐず寒くもありません。

尊　徳。物を考へてをる。――と言ふと？

横　山。先生。かの青木村名主、未だに御門前で、立騒ぎをる樣子でございますな。おきこえになりますか。

尊　徳。そのことか。（靜かに）聽こえてをる。

横　山。あれ程までして懇願致してをりますものを……先生はなぜ望みを容れてやらぬのでございます。なぜ救つてやらうとはなさいませぬか。

尊　徳。（微笑して）判らぬのか。

横　山。はい、判りません。

尊　徳。わしの採つてをる態度が、そなたには無情と見ゆるかな。不善と寫るかな。

横　山。決してさうは思ひません。先生には屹度何かお考へがあつての事だ、とは思ひますが、私の心が淺い故か、先生のお考への深さが計り切れず、それで苦しんでゐるのです。

尊　徳。そなたは、廉直達文の士だ。だがそなたのその若さからくるその感傷癖といはうか…

それを捨てゝ、ぢつと考へてみろ。すればわしの眞意も了解出來やう。まあ、よい、早く雜炊でも吸つて元氣を取戻せ。はゝゝゝ。おゝ、時に忠右衛門は何れへまゐつたのだ。歸つてしまつたのか。

忠右衛門。いえ、こゝにをります。（襖より顔を出し）何かご用でございますか。

尊　徳。いや、別に用ではないが。そちらで何を致してをるのだ。

彌太郎。（走り出で）お父樣。忠右衛門が風あげに伴れてゆかうと申します。行つてもよろしうございますか。

尊　徳。ほゝう、それは結構だ、いゝともゝ。だが、忠右衛門の小父さんは、今、ご用から歸つてきたばかりで、大へんに草臥れておいでだから、おやつでも頂いて、少し休んでそれからの事にしたらよからう。

彌太郎。はい、ではさう致します。

尊　徳。お前も、それからふみも、あちらの部室で皆と一緒におやつを頂くがよい。な。

ふ　み。嬉しいゝ。おやつ。おやつ。（尊徳の膝へ上り、ゆすぶる）

尊　徳。はゝゝ、重いぞゝ、ふみは。

彌太郎。彌太郎の方が、もつと重い。ほら。

尊　徳。いや、これは敵はん。

忠右衛門。坊樣ゝ、それではお父樣のお膝が潰れてしまひます。さ、こちらへおいでなさいまし。（伴れゆく）

（その時、豐田正作、急ぎ足で下手より緣を通つてくる。それと略同時に、庭の下手正面の柴折扉より岸右衛門あはたゞしく、併しおづゝと入つてくる。――門前の方より、勘右衛門、常吉、圓三などの喚き合ふ聲、一頻り騷がしく聽こえてくる）

豐　田。先生。

尊　徳。どうした。

豐　田。青木村の名主でございますが、どうしても先生にお目通り叶はねば、こゝで死ぬなど

と狂人のやうに喚き出し、人だかりは致しますし、いやもう、ホト〳〵手を焼いてをるのでございますが――

尊　徳。ふむ。

豊　田。如何取計つたものでせうか。いやどうも、呆れた莫迦者でございます。

尊　徳。（暫時、沈思。やがて）それほどまで致してをつてはおそらく歸りはすまい。よろしい。では會ふてやらう。

豊　田。は、ではあの、お會ひになつてやるのでございますな。

尊　徳。會ふてやる。さう言ひなさい。そして直ぐこゝへ伴れてくるがよい。

豊　田。承知いたしました。（急ぎ、去る）

横　山。畏りました。

尊　徳。うむ、それでもよい。横山、そなたはこゝにをつたがよからう。

（庭の岸右衛門、これもつき詰めた顔色をして縁の近く迄出てきて、尊徳へ何か言ひかけやうとしてはためらつて居る時、豊田が勘右衛門を伴れてきて一禮して忙しく去る。勘右衛門は蒼白な顔で、亂れた髪や姿を忘れたる如く、肩で息を切りつゝ縁先へ固くなつて畏る。居間の方では雜炊が出來てきて、下僕の佐吉文八迄呼込まれ、賑やかな内にも靜かに、暖い振舞が始まる）

尊　徳。名主。こちらへ進むがよい。

勘右衛門。先生、申譯ございませぬ。（打伏し）取りのぼせました揚句、ご門前を騒がしまして、何ともお詫びの申上げやうもございませぬ。でも、でも私、全く思ひ詰めまして、いつそ一思ひにと――（泣聲となる）

尊　徳。まあよい。そこでは話も出來ぬで、こちらへ入つたがよい。さ。

勘右衛門。はい。恐れ入りまして、はい。（もぢ〳〵しつゝ、やうよう入る）

（岸右衛門、庭先に蹲り、息を呑んで耳をすましてゐる）

尊　徳。早速だが、常州青木村は、現在の川副家のご領とならなかつた前には、村の生命ともいふべき、櫻川の堰の工事に要する費用の補助が、毎年御領主の手許より出てをつたさうだな。

勘右衛門。左様でござります。そこでどうやら旱魃の憂目も見ず、代々百姓を相續してまゐりましたが、川副樣の御領と變りましてからは、年々櫻川堰の工事の入費と働手を一ケ村僅か三十戸で分擔せねばならなくなりました。併しこれはもう誰の目から見ましても、全く無理と判つた話故、何度となく從前のご法通りにとお願ひ致してみましたが一向お取上げはなく、そこで自然堰の修復を怠りますので、用水不足となり、耕地は荒れてゆく一方でござります。遂には良田さへも、茅が茫々とはびこり、村方一同も、かうなつては、益ゝ鋤鍬を取る勇氣も失せ果て次第に村の規律は亂れるし、朝に夕に、醜い爭ひの絶間とてなく、どうにも全く手のつけられぬまゝ、今日に及んでまゐりました。

尊　徳。家ありやすゝきの中の夕烟――これはお前の村の神主大和田山城方に一宿を乞ふた旅の法師が詠んだとか言ふたな。家ありやすゝきの中の夕烟……名主、それでは訊ねるが、耕地良田が斯く一望茅野原と化し、村が衰微のドン底迄轉落してしまつたその原因が、どこにあるか、お前は擧げる事が出來るかな。

勘右衛門。それは、青木村の癌ともいふべき、櫻川堰荒廢のせいでございます。この櫻川堰の年々の修復さへ出來ますなれば……

尊　徳。待て。それは違ふであらう。

勘右衛門。ヘッ？

尊　徳。もつとよく考へてみろ。名主、わしが青木村へ、救ひの手を差延べてやらうとしないのは、つまりはそこなのだ。お前ら村民一同のその間違つた考へ方が、この方の氣に添はぬからだ。その内には氣がつくことかと、そなたが當所へまゐる毎に心待ちにしてをつたが、一向にその氣ぶりさへみえぬでなう。

勘右衛門。（蒼くなり）と申しますと、先生、私の申立に、何か間違つたところがございますので

せうか……

尊　徳。まだ心づかぬか。青木村衰微の原因が櫻川堰の荒廢にあり、その修復の手段がない故、耕地へほどこす術もないと言ふたな。

勘右衛門。はい。百姓達は幾ら働きたいと願つても、田へ引く水がございませんでは。つまり……

尊　徳。たはけ者！　田へ水が引けぬなら、なぜその田を畑にしやうとはせぬのだ。

勘右衛門。えッ。

尊　徳。田が一毛作なれば畑は二毛作。田を畑にしたらば、まさかに今日飢餓に瀕して、他へ救ひを求めずとも、やつてはゆけたらう。お前の村の百姓共は、人間の命をつなぐ物は水田の米ばかりだと思つてをるのか。畑へ作つた作物では飢は凌げぬと言ふのか。

勘右衛門。――

尊　徳。青木村衰微荒廢の原因は、結局お前ら村民の心柄から起つたことだ。怠惰不明の爲、自ら招いた結果だ。そのやうなたはけ者共に貸してやる力は、わしにはない。歸つて一同にさう申し傳えろ。歸れ〳〵、早々立歸れ。

（勘右衛門、目覺めたる如く、悔悟の涙にむせぶ。傍の横山、庭先の岸右衛門も、同時に、尊徳の眞意を知り、夫々頭を下げ、面もあげ得ずに居る）

勘右衛門。（やゝあつて）先生。全く先生の仰せの通りでございました。はい、目が覺めましてございます。私共は心得ちがひを致してをりました。苦しさ辛さの餘り、他力に賴ることばかり考へ、なすべきことのあるのに氣が付かなかつたのでございます。あまつさへご領主樣を怨み、又正直を申上げますれば、今迄の先生のお仕打ちまでも恨んでをりました。言語道斷と申しませうか、淺墓と申しませうか……先生、どうかお赦しなされて下さいまし。この上は、早速村へ立歸りまして、一同にもこの由を申しきかせ、これからは力を協せて自力更生のまことを盡すつもりでございます。

尊　徳。判つたのだな。（ぢつと見詰める）

勘右衛門。はい。有難う存じました。では勝手ながら、これにてご免を蒙ります。（横山に）貴方様にも、失禮致しました。（涙を拭き〳〵立去らうとする）

尊　徳。（不意に）これ、待て。

勘右衛門。は、はい。

尊　徳。田を畑にするといつても一朝一夕に、しかも饑餓に苦しむ者達に直ちに出來ることではあるまい。又、耕地一面茅野原とあつては、第一にその茅からして刈りとらねばならぬ。名主、お前もそのやうに心の眼がひらいてみれば、わしとても默つてこのまゝお前を歸せもせぬ。そこで先づ、今申した茅を刈りとつたならば、それを束にして、すつかり、この陣屋へ運んでくるがよい。三十駄につき一分の割で買上げてやらう。

勘右衛門。おゝ！　で、ではあの……（緣先へ、嬉しさの餘りへタ〳〵と坐り）有難う存じます。有難う存じます。この通りでございます。

尊　徳。それから先のことは、またその都度指圖する。では早く歸れ。

（勘右衛門、欣喜雀躍、禮を述ぶるも虛の空に、あはたゞしく去る。あと、靜寂。――かなり長い間――）

尊　徳。（靜かに）横山。どうだ。わしの眞意が判つてくれたらうか。

横　山。（平伏し、晴々と）たゞ〳〵恐れ入つてございます。有難いお心の程を勘右衛門も始めて知り、どのやうに喜ばしく存じたことでありませう。

尊　徳。この上は、明後日にでも閑を見て、靑木村に出向いた上、更に一同を勵ましてやらねばならん。そなたも一緒にまゐつてみるか。

横　山。畏りました。すゝんでお供いたしたく存じます。

尊　徳。なみ。なみ。

な　み。はい。（急いで立つてくる。その拍子に、庭に佇んでゐる岸右衛門に氣付く）まあ、そこにゐるのは、岸右衛門さんでは有りませんか。

岸右衛門。（狼狽する）はい、はい奥様……

尊　徳。なに、岸右衛門がそこにをつたのか。岸右衛門、岸右衛門、この寒いのに、そんな所で何をしてをるのだ。こつちへ上つたらどうだ。

岸右衛門。いえ、はい、そのう……（益々困る）

尊　徳。なみ、こちらへも雑炊が欲しいのだ。岸右衛門の分も持つてきてやれよ。

なみ。はい〳〵、畏りました。（居間の方へ去る）

尊　徳。岸右衛門、どうだ。今の話を聴いたであらうが。青木村名主は、わしの心が判つて、悦び勇んで歸つていつたで。お前もそれで安心したかな。は〳〵〳〵。

岸右衛門。（言ひ當てられて、いよ〳〵困る）いえ、そんな……あのウ、實は先生様、おいら、この草鞋をお納めに上つたのでございまして……

尊　徳。ほう、その草鞋をなう。

岸右衛門。はい、閑な時の手作りでございます。村の衆へも配りまして、穿いて貰つてをりますが、まことに失禮ながら、村お見廻りの時のお穿料にでもなすつて下さいましたら、おいら、こんな嬉しい事はございません。

尊　徳。（靜かに縁に出て）岸右衛門、お前の眞心のこもつたこの草鞋、わしは、何よりも有難く頂戴する。（正座して受取り、押し頂く）

岸右衛門。あ、あれ先生様、勿體ない、何をなされます。そんな事をされちや、おいら、おいらこつぱづかしくて……（と、居堪れぬ様子で尻込みし、つひに後をも見ずに逃げ出してゆく）

（その時、なみ三人分の雑炊を運んでくるが、逃げてゆく岸右衛門を、呆れたやうに見送る）

――幕――

二幕目

（一）

常州、青木村、名主勘右衛門の家。藁葺の、奥行の深い母屋。

上手は土間となり、それに接して豪所あり。豪所の下手は廣間となつてゐて、疊も柱もすべて古く黒光りがしてゐる。廣間の彼方はくすぶりたる襖にて、次室へ通ず。母屋よりやゝ離れて下手の方には牛小屋、納屋などあり、更にその後方遠くに土藏も見える。

（ひろき前庭の上手は、門）

第一幕の、同じ日の黄昏近く——

（廣間には、青木村下組名主重左衛門、神主大和田山城、勘右衛門女房くみ、その他、村の重

立つた百姓達が詰めてゐて、若い者達は土間だの、前庭だの、納屋の前だのに、一群づつかたまり合ひ、各々眼ばかり光らせた蒼い額を集めて、時々溜息を洩らしたり、遅い勘右衛門の歸りを咄し合つたりしながら、待つてゐる）

喜　助。（嘆息と共に）遅いなう。

大和田。遅い。（同じく嘆息）

村年寄甲。やはり、駄目なのかな。なう、重左衛門どの。

重左衛門。——（胸組をして、考へ込んだまゝ、聽こえぬ如し）

村年寄乙。（土間の方へ）おい、誰か、村境迄出迎えにゆく者はないか。

村人一。おらが、行つてみやうか。

大和田。（鋭く）加六兵衛だな。歩けば腹が空るんだぞ。腹が空つても構はぬなら、行つてこい。だからお前は、他人から薄野呂だなんと言はれるんだ。

村人一。……（寒々と肩をすぼめ、默る）

村年寄乙。だが、神主さん。いつ歸るとも一向見當のつかぬ勘右衛門さんを、かうしてじつと待つてゐると言ふのも、實に堪らないではないか。誰か出迎えにでも出てゐれば、幾らか氣のもめるのも救はれると言ふものだ。

大和田。では、貴方がいらしたらいゝでせう。

村人二。さうだ〳〵。こんな時、先へ立つて事をやるのが、村年寄の役だ。

村年寄乙。（怒って）誰だ、そんな憎まれ口を叩く奴は。前へ出ろ、前へ。

村人三。おら、知らねえ。

村人四。おらも、言やしねえ。喋るとひもじくなるばかりだからな。へゝゝゝ。

く　み。だけど、うちの人は、ほんたうにどうしたと言ふんだらうねえ。（誰にともなく）幾度も言ふやうだが、眞逆あの人の身に、何か、とんでもない間違ひでも、起つたんぢやないでせうねえ。

村年寄甲。（他の事を考へてゐる風で）そんな事はあるまい。

く　み。（焦々と）あの人ときた日には、ほんとに我武者羅の一本氣なんですからね。私はしないでも濟む心配までしなくてはならないんです。あゝ、厭だ〳〵ほんとに、一體どうしたと言ふんだらう。

重左衛門。おくみさん。緣氣でもねえ事を云ふやうだが、勘右衛門さんの身に、いつどんな間違ひが起らねえものでもねえ。お前さん、それだけの覺悟は、ちやんとしてゐなくてはなりませんぜ。何事も村の爲なんだ。

く　み。村の爲、村の爲つて！　えつ？　重左衛門さん、今何て言つたんです。（俄かにせきこみ）私、考へ事をしてゐたもんで、よく耳に入らなかつたけれど、うちの人が何ですつて？　何か貴方に言ひ置いて行つたんですか。ね、重左衛門さん。

重左衛門。なにさ、今日勘右衛門さんが行つて、不幸にして歎願が屆かなかつたならば、明日は二番手のおれがゆく。おれが命を捨てる覺悟でいつて、それでも說き陷せねば、明後日は三番手の喜助がゆく。こゝまでひた押しに押していつたら、いくら櫻町陣屋の先生だつて、きつと情にほだされて乘出して下さるだらうと、實は相談を決めた上で、今日は先づ改めて勘右衛門さんが出かけていつた譯だとかう言つたのさ。

大和田。併し下組の名主さん。私らは二宮先生を、餘り買被り過ぎてゐるのではないでせうか——私は、近頃どうも、そんな氣がしてきたのです。成程、學者としての、又實際家としてのその手腕に對しては、敬服を吝むものでは有りませんが、その人間的な價値は、果してどんなものですか。

村年寄丙。大和田さんの仰有る通り、わしもさう思ふてゐるがな。別に、おらたちの懇願を突つぱねてばかりゐるで、さう言ふのではないが、世間で噂してゐる程、立派な人格者でも情誼に厚い人でもなく、案外に腹の狹い男なのではないだらうか。

重左衛門。お前さん方、臆測だけで、他人の事を彼是言ふものぢやねえ。おれは先生には、二度もお目に掛つてよく知つてゐる。

（皆、默る）——間——

村年寄甲。大分暗くなつてきたが、ハテ、勘右衛門さんは、遲いなう。

喜　助。全く、遲い。

（暗憺たる氣配が黄昏の色と共に、次第に濃くなる一方である。寂として、嗟嘆の聲のみ高い。その時、突然前庭の、門寄の一隅で、百姓勇助と寸七の喧嘩起る。土間にゐた者、納屋の方にゐた者など、皆、何事が始まつたのかと、驚いて二人の周圍に馳集つてゆく）

村人五。何だ〳〵。

村人六。どうした〳〵。

寸　七。この野郎、くたばりやがれ。

勇　助。汝、貴樣こそ、くたばりやがれ。（二人眞黑になつて摑み合ふ）

村人七。おい〳〵やめろ〳〵。

村人八。止めるな。ほつとけ〳〵。

重左衛門。（上り框へ出る）莫迦野郎。何をしてゐやがるんだ。

寸　七。こん畜生つ。

勇　助。わつ、亦殴りやがつたな。

寸　七。殴つたが、どうした。このおせつかい野郎。

勇　助。なに、人でなしの、ごろつき野郎め。

寸　七。汝、その舌の根を停めてくれる。

重左衛門。こら、やめろ。勇助、寸七、やめろつたら、きこえねえのか。（皆々やうよう二人を引分ける）お前達は、今日、何の爲に、此處へ集つてきてゐるんだ。村が救はれるか救はれねえかの瀬戸際に立つてゐるんぢやねえか。性の悪い野良犬と同じことで、所嫌はず寄ると觸ると、食物の奪ひ合ひか、噛み合ひばかりしてゐやがる。

勇　助。（額際の血を拭き乍ら、口惜さうに息を彈ませ）さうぢや有りません。この無頼漢が、場所柄もわきまへねえで、手弄みを始めやうとするから、それで、おいらが止めたんだ。

寸　七。何をしやうと大きなお世話ぢやねえか。手前にやらうと誘つた譯ぢやねえや。

勇　助。だからつて、これが默つて見てゐられるか。人のいゝ新吉さんに粟一合かけさせておいて、いかさま賽で、だまくらかし、それを捲上げやう魂膽ぢやねえか。

寸　七。こん畜生！　何を吐かす。（再び摑み掛らうとして抱止められる）

重左衛門。寸七、お前といふ奴は、どこまで業曝しな奴なんだ。（庭へ出てくる）人間の屑といふのはお前のやうな奴のことだぞ。（寸七、ふてぶてしく外方を向き、胸の前など掻き合はせてゐる）情ねえ、何度言つたら、そのさもしい根性が直るんだ。

寸　七。下組の名主さん。では伺くがね、おらがこの賽を捨てたなら、今日が日からでも食へるやうになりますか。

重左衛門。何だと？

寸　七。そんならば、直ぐにでも賽を捨てますがね、へん、下組の名主さん、どうでございますね。

重左衛門。この野郎、何ぞと言ふと、さうして喰つて掛つてきやがつて。承知しねえぞ。

寸　七。承知しねえもするもねえでせう。判つた話だ。おらだつて何も、博奕打の家へ生れてきた譯ぢやねえ、親代々の百姓さ。所がその百姓の田は埋まり、働きたいにも働けず

食ひたくも食へず、お蔭で永年連添つた嬶を、あらうことか干乾にして殺しちまつたい。なあ、好きな賽でもやつて儲けながら、氣をまぎらはしてゐなかつた分にや、ん、おら狂人にならア。

重左衛門。いゝ加減にしろ。默つてりや、不幸が汝の家へばかり舞込んだやうな口を叩きやがつて。村中皆が皆上も下もなく苦しんでゐるんだ。親父や子を殺した者も手前ばかりぢやねえ。汝の眼にはそれが見えねえとでも吐すのか。

喜　助。寸七さん。なあ、おれたちは皆不幸なんだ。だからその不幸に打勝つて生きてゆく爲に、皆氣を揃えなくては不可ないんだ。そして、ちつとでも早く、よい日の目を拜まにやならん。名主樣がよ、あゝして、櫻町のご陣屋へ何度も〳〵足ぶみしてゐて下さるのも知つてゐやうに。

寸　七。名主さんのやつてゐることは無駄な骨折だと、おいらア前から言つてるぜ。今日だつて駄目に決つてゐるのよ。櫻町の先生だか、はつつけだか知らねえが、この世智辛い世の中に、誰が領分ちげえのこの村を救ふ仕法なんかを無料匁で敎えてくれるものか。何度何十度通つたつて埒の明くことぢやねえ。へん、蟲のいゝ野郎だと笑はれるばかりだ。

重左衛門。この野郎、とんでもねえへらず口を叩きやがる。

（重左衛門、勘忍袋の緒を切り、寸七に打つて掛る時、薄野呂と言はれた村人一が、不意に頓狂な聲をあげる）

村人一。あれよ。あそこへ名主樣が歸つて見えたぞ。

重左衛門。何、勘右衛門さんが。

村人二。やあ、ほんにぢや。名主樣がお歸りだ。おい皆の�(«群の者わつと聲をあげて、門の方へ押出してゆく)

く　み。（夢中で庭へとび出し）重左さん、ほんとですか、あの、うちの人が……

重左衛門。眞正だ。歸つてきた。うふ、歸つてきた。うはゝゝ、歸つてきた。歸つてきた。

（勘右衛門、疲勞し切つて、喘ぎつゝ、村人達に圍まれて出る。重左衛門走り寄り、確りと手を握る）

重左衛門。勘右衛門さん。よく歸つた。よく歸つてきてくれた。

く　み。あたしや、あたしやもうお前さん……（泣く）

勘右衛門。（何か言はうとするが、息が彈んで言ひ得ず）

重左衛門。新吉。喜助。誰か、水だ、水だ。水を持つてこい。

（新吉、頷き、臺所へ走り込む。重左衛門、村年寄達に指圖して、ぐつたりしてゐる勘右衛門を廣間へ抱へ上げる。くみ、おろ〳〵しながら、背方（うしろ）へ廻り勘右衛門の背を擦る。新吉、水を運んできて飲ます。一同、不安氣に、土間や庭からそれを見詰めてゐる）

勘右衛門。……皆、濟まない。有難う。もう大丈夫だ……うむ、何しろ、櫻町陣屋から三里が道を、駈通しに駈けてきたものだから。

（一同、驚き騷ぐ）

村年寄甲。して〳〵早速ぢやが、首尾は、どうでしたな。

重左衛門。（脇から、强く）聽く迄もねえことさ。判つてゐるぢやねえか。勘右衛門さんが、かうして歸つてきたのが、歎願の屆いた證據ぢやねえか。うつふゝゝゝ。

（それを聽き、有頂點になる者、まだ半信半疑の者、全く信じない者などの喧騷の裡に、勘右衛門よろ〳〵と立上る）

く　み。ま、お前さん、何さ。どうしやうと言ふんですよ。

勘右衛門。（女房の手を振り拂ひ、柱へ身を支えつゝ、いきなり叫ぶ）皆の衆！　鎌を持つて、集れ。

鎌を持つて……（一同、驚き呆れてどよめく）女も、子供も、老人も——働ける人間は、皆鎌を持つて、こゝへ集るんだ。

寸　七。成程、さうか、判つた。之から村方總出で、櫻町陣屋へ殿り込まうと言ふんだな。

（それに跟いて、氣の荒い一團、俄かに氣負立つ）

勇　助。おいす七、何ていふ大それたことを吐かすんだ、莫迦野郎。だが名主樣、一體鎌を持つて集り、それで何をしやうと仰有るのですか。

勘右衛門。茅を刈るのだ！（一同、呆れて顔見合はせる）

重左衛門。勘右衛門さん。ちつと落着いてくれ。藪から棒に、鎌を持つて集れの、茅を刈るのとそれぢや、何が何だかサツパリ譯が判らねえ。一體、二宮先生の仕法の話はどうなつたんだ。順を追つて納得いくやうに話しておくんなせえ。（さうだ〳〵と喚く聲、四方に起る）

勘右衛門。皆の衆、私らは今迄、心得違ひをしてゐたのだ。まだなすべきことが有りながら、しかもいたづらに他人の力にばかり賴らうとしてゐた。

村人四。いや、そんなことはねえ。

村人五、名主樣、どうかなすつたんではねえか。第一、櫻川堰があんな風ぢや、何をしたくも手も足も出ねえぢやありませんか。

勘右衛門。田が乾上つたら、なぜそこを畑にしやうとしないのだ。（一同、顔見合はせる）つまりは村方一同が怠者ばかりなのだ。先生はさう仰有つた。全くその通りだ。どうだ、その通りぢやないか。（一同、抗辯する者なし）そこで私達は、先づ耕地の茅を刈取らなくてはならない。明日とは言はず、今日これからすぐ、茅刈にかゝる。判つた者は早くしろ。自分の非を悟り、魂を入替えやうと思ふほどの者は、直ぐ鎌を持つて集れ。（一同無言。併し立去らうとする者なし）

まだ氣が付かないのか。腑拔けッ。誰も鎌を取りに戻る者はないのか。

村人六。名主樣、話は判つたがなう、茅を刈つて畑にすると言つても、今日明日に芋一本、大根一本出來やしませんが。おら達は飢えてゐるんだ。

村人七。さうよ、作物の出來る迄、どうやつて生きてゆくんだ。

村人八。茅は食へねえからな。ヒ、、、。

勘右衛門。お前方にそんなことを言はれる迄もない。二宮先生はな、刈取つた茅をすつかり買上げて下さらうと仰有るのだ。

重左衛門。なに。ではあの、茅を。先生が買上げて下さると仰有つたのか。（一同、見る〳〵活氣付いてくる。勢込んで、鎌を取りに走りゆく者も出る）

勘右衛門。皆飢ゑてゐるだらう。腕の力も失せ切つてゐるだらう。だが我慢して鎌を取れ。一日早く茅を刈取れば、一日早く私達は食物にありつけるのだぞ。新しい力と希望が湧き上つてくるのだぞ。

村人一。食へるんだとよ。

村人五。さうだ、食へるんだ。（夢中で走り去る。それに續いて、又數人走り去る）

重左衛門。（感激をこめて）勘右衛門さん。村は救はれる！

勘右衛門。いよ〳〵更生の日がやつてきたのだ。二宮先生が青木村仕法に乘出して下さつたのだ。重左、確りやらう！

重左衛門。うん、確りやらう。確りやらうぞ！

勘右衛門。さうだ、力一杯、ぶツ倒れる迄だ！（重左衛門と相抱いて、男泣きに泣く。村人達、異常な感動を受けて、我も我もと鎌を取りに去る）

勇　助。新さん、行かう。

新　吉。おう、行かう。

寸　七。待つてくれ。おらも行く。

勇　助。なに。おめえも、やるのか。

寸　七。やる。働く。だが鎌がねえのだ。空いてゐるのがあつたら、貸してくれねえか。

勇　助。よし。貸してやるとも。早く、こい。

寸　七。おゝ。（去る）

大和田。（沈默より戻り、獨言の如く）私も間違つてゐた。どこへ目をつけてゐたのか。――さうだ、二宮先生へお詫びの印までに、眞心こめて、私も茅を刈らう。名主さん、どうか鎌を貸して下さい。

勘右衛門。さうですか。貴方までが一緒にやつて下さるのですか。おくみ、お言葉だ。支度して差上げろ。それから私のも——

く　み。お前さん、大丈夫ですか。私がやりますから、何でしたら、お前さんは……

勘右衛門。なんの大丈夫だ。では重左さん。お前も——

重左衛門。ようしとも。やるとも。

（一同、頬を輝かし、甲斐々々しく、支度に掛る）

（二）

村内、茅野原と化せし、耕地の一部。勘右衛門、勇助、喜助、その他二三人の村人達が下手の一角で、熱心に茅を刈つてゐる。その横手で老人や子供達が、茅が刈取られる傍から、それをせつせと束にしてゆく。その所よりズツと上手へかけて、茅はすでにその大部分を刈去られ、悉く平坦になつた耕地が、遠く迄、ひろ〳〵とひらけてゐて、彼方に、櫻川の堤が見える。（前場より、三日の後——）

（下手より、勘右衛門女房くみ、村の女達と共に、賑やかに出る。何れもかひ〳〵しき身支度にて、手に手に土瓶だの握飯、澤庵など盛りたる器だのを持つ）

く　み。皆の衆。ご精が出ますね。

勘右衛門。おゝ、くみか。飯だな、おい皆、飯だ〳〵。

喜　助。へい。おい、飯だ〳〵。（一同、子供の如く歓声をあげ、鎌を捨てゝ集る）

（女達、明朗な冗談を云ひつゝ、次の場所へ晝食を配りに去る。一同は、握飯と茶を中心に圓く坐り、食ひ始める）

勇　助。旨え！

喜　助。（口一杯、頬張りつゝ）うん、旨え。飯をかうして喉へ通す事が出來やうとは夢にも思はなかつたぜ。

勇　助。さうよ。一昨日昨日まで草の根ッこ一つ、滿足に食へなかつた俺たちが、こんな旨え飯をなあ。加六兵衛がよ、櫻町陣屋から、米俵と澤庵漬の樽が屆いたのを見て、おい〳〵泣出したさうな。俺も胸が一杯になつたよ、あの時は。おい、ちよつとすまねえが、その土瓶をとつてくれ。

喜　助。無理もねえ。

（一同、しんみりとして食ひ居る時、下手より重左衛門、くる）

重左衛門。はゝゝ、皆、やつてゐるな。（勘右衛門の傍へ腰を下ろす）どうだい、すつかりひらけたなあ。櫻川の堤が、それ、そんなに近くに見えるぢやねえか。あゝ、何とも言へねえいゝ心持だ。

勘右衛門。この分だと、どうやら、今日一杯で、片がつきさうだな。

重左衛門。つくとも。夕七ツとまではかゝるめえよ。

喜　助。それにしても、いや大した茅でしたなう。刈るのに四日もかゝつたぢや有りませんか。

勘右衛門。うむ。だが、この四日程、村中の者が心を協せて働いたことは又となかつた。

重左衛門。さうだ。その通りだ。誰も彼も、我を忘れてたゞひたむきに働いた。おれ達はこの感激を忘れてはならねえ。この充實した力を、いつまでも失つてはならねえ。

勇　助。下組の名主さん。ご覽なせえ。（上手を指し）あそこへ、寸七が、馬をひいてきます。

重左衛門。うむ。――彼奴はな、今朝から休みなしに、あゝして茅を櫻町へ運んでゐるのだ。一昨日だつけ、彼奴はおれの前で、もう一生懸は弄くらねえと誓つた。そしてあの通り人一倍働き出したのだ。何だかいぢらしくてな。おれは彼奴の姿を見ると涙が出て仕樣がねえよ。

（聽て上手より寸七、背に茅の束を山と積んだ馬を曳いて出る。その顏は陰險な影が除れ、見

違えるやう活々と輝いてゐる）

勇　助。やあ寸七、大分精が出るなあ。今さう言つて咄してゐた所だ。

寸　七。（足は休めず）なんのお互様さ。はゝゝ。おめえもご苦勞だ。皆さん、行つてまゐります。（一同、口々に犒ひの言葉で、それに應える。勇助いきなり立上り、土瓶を持つて追ふ）

勇　助。寸七、待て。

寸　七。おい、なんだ。

勇　助。往復六里の長道だ。喉をしめしてゆけ。

寸　七。なに、おら、いゝ。

勇　助。そんなことを言ふな。おいらの思ひさしだ。受けろ、受けろ。（無理に土瓶の口飲みをさせてやる）

寸　七。うつ、あゝ、旨え。有難う。元氣百倍だ。ちや行つてくる。

勇　助。よし、たのむぞ。（肩を叩き、嬉しげに見送る）

（寸七が下手へ去るのと略入違ひに花道より新吉があはたゞしく、勘右衛門を呼び立てながら走つてくる）

勘右衛門。おうい、こゝだ〳〵。何の用だ新吉。

新　吉。あゝ名主様、只今櫻町陣屋から、お役人がお越しになりました。名主様を尋ねておいでです。

勘右衛門。なに、そりやほんにか。どんなお方だ。お幾人でお見えになつたのだ。お出迎えしなけりやならぬ。（一同、急いで立上る）

新　吉。それが、あれ〳〵、あそこへ見えました。あれですあれです。

勘右衛門。（驚いて）おゝ、ありや二宮先生だ！

重左衛門。おい皆、裾をおろせ。そら〳〵、そこらの物を片附けて。

（一同、狼狽の裡に、各々身仕舞したり、周圍を取片附けたりして待つ内、花道より二宮尊德、岸右衞門と專右衞門、佐吉、丈八など引伴れて、村の年寄數人に案内されて出る。一同叮嚀にそれを迎えて挨拶する）

尊　德。（機嫌よく一々受けて）ほう、勘右衞門も重左衞門もをつたな。今日はお前らがどんな働きぶりをしてをるか、それを見やうと思つてな、實はわざと不意にやつてきたのだ。何れも大分眞劍にやつてをるやうではないか。はゝゝゝ。

勘右衞門。遠路のところをお心におかけ下さいまして誠に有難う存じます。先生の重ね〳〵お情の籠つたお惠みを受けまして、村の者一同、甦つたやうな心地でお互に勵み合ひまして、この通り懸命に働いてをります。

尊　德。それは何より結構だ。――專右衞門、今日午前迄に陣屋へ入つた茅の總數は、どの位になつてをる。

專右衞門。はい。（懐中より書付を取出し）一昨日が六百五十八駄でございました。それから昨日が恰度七百駄入りまして、本日が百九十九駄の總計一千五百五十七駄となります。

尊　德。ふむ、すると今日一杯、あと二百駄程あるとみて――三十駄一分替え、さつと十五兩程になる勘定か。

專右衞門。先づ、その邊でございませう。

尊　德。名主。では明朝、その買上金を下げ渡すによつて、陣屋迄罷り出るやうに。

勘右衞門。はい。恐れ入りましてござります。

尊　德。（周圍を見廻し）成程、あそこに見えるのが、あれが例の櫻川だな。

重左衞門。はい、左樣でございます。

尊　德。併し、かうして見渡したところ、茅はさて刈取つたものの、これからこれだけの荒地を起返すといふことは、考へてみれば中々の難事だ。むしろ、不可能に近いやうだな。

勘右衞門。仰せの通りでございます。併し、私共は先日の先生のご教訓を確りと胸に抱きまして打ち倒れる迄、鋤鍬をふるふ決心でございます。

尊　德。さう言ふに易く、行ふに難きことだぞ。これを爲し遂げやうとするならば。餘程の忍

耐力と不斷の努力と協力が必要だが……（探る如く）村方一同の者にそれだけの心構えが眞實出來てをるのか。

重左衛門。はい、出來てをります。例へ難事でありませうとも大業でありませうとも、私共の決心は絶對に崩れは致しません。

勘右衛門。左樣でございます。例へ荒地が八分通りしか起返せませんでしたとしても、私共は悔ひはしませぬ。心のまことのありつたけ、體の力の續く限り、働きに働くつもりでございます。

尊　德。（滿足氣に聽き入り）うむ。うむ。さうか。お前ら一同に、そこ迄の堅い決心が出來てをるのなら、よし、やつてみろ。やつてみるがよい。もしも、この大難業を、お前らの力で、見事成就する事の出來た曉には、わしは、青木村の癌を取除いてやらう。

勘右衛門。えッ？　ではあの櫻川堰の修復を、先生が——

尊　德。さうだ。櫻川堰の修復を約束する。よいか、必ずともに心にゆるみなく、力の及ぶ限り勵むがよい。

勘右衛門。（喜びに興奮しつゝ）皆聽いたか。今の先生の有難いお言葉を聽いたか。私らが荒地起返しを見事爲し遂げたら、その時こそは先生が、あの櫻川堰を直して下さらうと仰有るのだ。忘れるな。いゝか、働くのは誰の爲でもない。皆、自分達の爲なのだ。死ぬ迄働け。判つたら誓へ。皆、誓へ。（一同、手を取合ひ、抱き合つて、感動の裡に、口々に誓ふ）

尊　德。天道、人を殺さず。天は自ら助くる者を助く。なう、お前らが、怠惰から目覺め、自らの力によつて生きやうと、眞劍に努力する時、お前達は、自然に救はれるのだ。お前らの行手は、希望と光明に輝き滿ちてくるのだ。忘れまいぞ。

一　同。有難う存じます。有難う存じます。（地にひれ伏して、感謝の涙にくれる。——その時、上手より横山司右平が忠右衛門を伴れて、出る）

横　山。先生、こゝにおいでございましたか。大分彼方此方探しました。（輕い咳などする）

尊　德。いや、ご苦勞であつた。したが横山大分疲勞してをるやうだな。何事も體あつての物種と言ふこともある。體を大切にしてくれねばならぬ。どうだ、先へ歸つて休んだら

どうだな。

横　山。いや何ともございません。

尊　徳。では、よいが。して調査はすつかりついたかな。

横　山。お話外の酷さでございまして、三十戸の内、二十五戸迄は、屋根を修理せぬでは、とても家の役は致しません。

忠右衛門。誠にはや、ぞつとするやうな荒れぶりでございまして——

尊　徳。十年前を思ひ出しはせなんだか。はゝゝゝ。

忠右衛門。實は只今も道々、横山樣としみ〴〵先生樣の有難さを思ひ起し、當時の私共の暮しぶりなど話合ひながらまゐりましたところでございます。

尊　徳。それもよいことだ。人間は、悪い昔を忘れぬ事が大切だ。時に名主、今聽いたやうにお前の村の家々の狀態をこの人たちに調べて貰つたところ、三十戸の内二十五戸迄が屋根を直さんければ家の用をなさぬさうな。そこで、お前の村から買上げてやつた茅な、これは多分その茅でお前の村の家々の屋根を葺直す役に立つことになるであらうと思つてゐたところ、やはりその通りになつた。

横　山。一同、先生が、お買上げ下さつた茅を以て、其方らの家々の屋根を葺直して下さると仰有るのだ。今迄耕地を塞いでをつた邪魔物が一轉して雨露を防ぐ役をする。どうだ物も用ひやうで、禍轉じて福となる。先生の深いお心配りの程を何事にまれ、學ばねばならんぞ。

（一同、涙にむせびつゝ、尊徳の姿を振り仰ぐ）

尊　徳。では屋根の葺替は明日から取掛らせやうから、お前らは、たゞひたむきに荒地の起返しに力をつくせ、よいか。それから、わしは一應、櫻川の堰を見分しておかうと思ふのだが、名主、お前手が空いてをつたら、案内してくれぬか。

勘右衛門。はい、畏りましてございます。ご案内申上げます。（立上り）重左さん、ぢやあ、後を頼みますぞ。

重左衛門。よしとも。さあ、皆、しつかりやるんだ。

（尊徳一行、勘右衛門の案内で、一同の見送りの裡に上手へ入る。老百姓の一人など地に伏し兩掌を合はせていつまでも尊徳の後姿を拜んでゐる。折柄、更生の力に滿ちた若い村人たちの唄ふ草刈唄が聽こえてくる）

――幕――

大詰

（一）

青木村北端、櫻川の堤上。（舞臺前面は櫻川のながれのこゝろ）

堤上、上手寄には堀立小屋を設け、此處に酒だの餅だのを用意して、村の女たちが出張つて、川普請に從ふ村の人々や櫻町より差向けられてきてゐる人足共の接待をしてゐて――

堤上には、ひつきりなしに、働く人々が往來してゐる。

堤の彼方に展開する青木村の耕地は、今や、見事な更生の春を迎え、農作物は充ち、遠く雜木林の木隱れに見える二三軒の農家からは、靜かに、紫色の煙が立登つてゐる。

〔前幕より約一年餘り經過せる、天保四年春の、よく晴れた日の午後――〕

人足たちに混つて立働く村人たちの姿は、見違える程明るく逞しい。

（寸七、勇助など、他の村人たちに混つて、小屋で一息入れてゐる）

寸　七。あゝ旨え。かうして一働きした後で飲む一杯の酒の味は、勇助、又格別だのう。

勇　助。全くよ。キュウツと腹へしみ渡るぜ。さ、この元氣でもう一頻り行かう。

寸　七。おいきた。（二人、小屋を出て、畚籖を擔ぎにかゝる）ホラ、どつこいしよ。

勇　助。やつとこな。（畚籖を擔ぎ去る）

喜　助。さてと、おいらもゆくとしやう。

村の娘。もし喜助さん。お餅が燒けましたのに。

喜　助。さうかい。ぢや貰つていかう。

村の娘。これも、もう一つ。

喜　助。やあ〳〵、濟まねえ。だがこんなに特別に構つて貰つちや、新吉さんに恨まれやしねえかな。

村の娘。あら、なぜさ。

喜　助。白を切りなさんな。今年の秋には、下組の名主さんの仲人でさ、へゝゝ、ご婚禮だろ。

村の娘。ま、知らない、喜助さんは！（眞赤になつて小屋へ逃げ入る）

（休んでゐる他の人々、どつと囃し立てる。喜助、まだ冗談を言ひつゝ、鉢卷を締直して去る）

村の老人。（しんみりと）だがよう村の衆、この青木村が、こんな樂しい笑ひ聲に湧き返つたり、秋には又、目出度い婚禮まで行はれるなんて、まあこゝ何年ぶりの繁昌かなう。まるで夢のやうな氣がする。

村　人　二。それに見ろ、あの作物の出來のよさをよ。あの邊もつひ一昨年の冬迄は一面の茅野原だつた！　皆聽け、あの青々とした麥の葉の鳴る音をよ！

村の老人。（暫し樂しむやうに聽入り、やがて呟く如く）二宮先生樣のご恩を忘れちやならねえ。……のう、……有難てえことだ。有難てえことだ。

（裸人足の一團、汗を拭き拭き、一息入れにくる。村の女達は、それらにも愛想よく、茶碗酒や餅を配つてまはる）

く　み。（女共を指圖しながら人足頭に）でも、毎日いゝお天氣が續いて、ほんとに結構ですねえ。

人足頭。大助かりです。こゝで大雨でも降つた日には、折角八分通り仕上つた川普請も一たまりもねえ。

村人四。どうかまあ降らせたくないものだ。今も堰の所で二宮先生樣が、上組の名主樣にそのことを話してゐらしつた。堰の基礎普請を、だから何でも急がにやならねえんだと。

人足二。二宮先生樣の名が出たから言ふがね、おらはこれで人足稼業を、足かけ十年やつてゐるがね、今度の川普請ほどうめえ仕事にぶつかつたのは、後にも先にも始めてだよ。賃銀の割はよし、おまけにかうして堤の上へは休み小屋までして下すつてさ、飲み放題食ひ放題ときてらア。

人足三。おめえ、一生涯、櫻町の先生樣の仕事ばかりしてゆきてえと言つたぜ。（皆、どつと笑ふ）

村人五。そりや人情だとも。俺達にしてからが、これは俺達村の川普請だに、夫役に當つた者には、ちやんと賃銀を下さるばかりか、外に日一升の夫米迄下さるんだ。有難てえとも勿體ねえとも言樣がねえ。

人足四。こりよウ天下一の極樂普請と言ひやす。

村の老人。ほつほう、これは人足さん、うまいことを言ひなすつた。全く天下一の極樂普請だ。

一　同。さうだ／＼、櫻川の極樂普請だ。

人足五。その威勢で、もう一働きしてきべえ。

人足共。ようしよし。

（人足の一團勢ひ良く去る。入違ひに勘右衛門と二宮尊德、何か咄し合ひつゝ出る。尊德は手に設計書を持つ。一同叮嚀に挨拶する）

尊　徳。（設計書を示し）勘右衛門。この堰框を埋めるには、どうしても、一時水流を堰止めてかゝらなくてはならぬぞ。これには、わしも大分頭を痛めてをるが、この所だな、つまり両脇の板圍だが、これ又、肝腎だ。特に念を入れる必要がある。

勘右衛門。はい。さう致しましたら、もつと土を固めました方がよろしうございませうなあ。

尊　徳。先づ、それに越したことはあるまい。専右衛門や忠右衛門にもよく申含めてはあるが、兎に角、二度と再び、堰の崩れぬやうにせねば、又々毎年修復を要するやうなことになるでなう。

く　み。先生様、さぞお疲れでゐらつしやいませう。お息繼にお一盃、如何でございますか。（怖々と、冷酒を勧める）

尊　徳。いや有難う。頂かう。（腰をおろし、旨さうに飲む）名主、わしもな、毎日やつてきて、川普請の監督をしてやりたいのだが、中々さうもゆかぬし。——それに今、横山がひどく病んでをるので——

重左衛門。ご心配なことでございます。いつも物靜かな、しかし、どこか弱々しい方でございましたで……

尊　徳。あの男は、稀に見る立派な人物だよ。わしが櫻町陣屋へ赴任してきて以來、たゞ一人の門弟とも片腕とも頼んできた程だが。（憂ひ深く）虚弱なので、そればかりが氣にかゝるよ、（ちらりと涙が光る）

重左衛門。——（見てはならぬ物を見たやうに慌てゝ眼を反向ける）

尊　徳。（氣をかへる如く）併し名主。この村も、思へば僅かな年月の内に、ようも見事に復活したものだなう。

勘右衛門
重左衛門　はい、これも皆先生のお蔭でございます。

尊　徳　いや、さうではない。お前らが、自己の力に生きることを悟つたからだ。人間、元を糺せば、無一物、裸一貫でこの世へ出てきたのだ。無より有を生み出さうとするには、自己の力にまつの外はない。この青木村が今日このやうに立派に更生したのは、わしの言葉によつて、自己に生きることを悟り、徒手空拳、ひたむきに荒地の起返しに努

力し續けたからだ。櫻川の堰の修復が出來ぬからと言つて、耕地といふ耕地を、茅の原と化して手をつけず、他人の力にのみ頼らうとしてゐた頃は、何一つ出來なかつたではないか。どうだ、自己の力に生きるといふことは自分の幸せとなるは勿論、同時に一ケ村の幸となり、ひいてはそれが一國の福利となる。人間自分一人だけの生活と言ふものはないのだ。よいにつけわるいにつけ必ず他人の生活とつながりを持つてゐるといふことを忘れてはならない。お前らの過去は失敗であつた。併し、過去の失敗は失敗でよい。このわしとて、缺點もあれば失敗も多い。たゞそれを、常に檢討し、改め、心の糧として身を修め、高めてゆく努力を吝まぬ人間こそ、價値のある人間と言へるのだ。

勘右衛門。先生！　私は先生のお訓へを承ります毎に、この心が伸々とひろくなり、人間に生れた有難さをしみ〴〵と感じます。有難うございます。有難うございます。

（その時、下手より、岸右衛門、急ぎ、くる）

岸右衛門。先生樣。

尊　德。おゝ、岸右衛門か。何用だ。

岸右衛門。只今、堰の上へ足場を組みます故、先生樣のお指圖を願ひたいと、人足衆が待つてをりますが——

尊　德。おゝさうか、よし〳〵、直ぐゆく。

（尊德、忙しく立上る。皆々、尊德にしたがふ。どこからか、小鳥の囀りが長閑に聽こえてくる）

（二）

櫻川の堰。堰の眞上に、川幅一杯に足場を組み、これに綱數條によつて支え釣り下げた茅葺の屋根の如き形の物あり。（これは、支えの綱を切つて、その茅の屋根の如き物を、數丈下の川の眞ん中へ、切り落し、川底に沈めて、堰の基礎を作る爲の仕掛である）併

し堰上に集つた人々は、それを知らぬまゝ、たゞ無性に騒ぎ立てながら、この不可思議な茅の屋根を見物してゐる。

前場より、二日の後——

人足一。いやもう、とんと奇態な物が出來上つたものだ。堰の眞上へもつてきて、こんなえたいの知れねえ屋根みたいな物を拵へさせなすつて、一體、どうなさるおつもりなのだらうなあ。

人足二。（煙草を吹かしながら）何れはまあ、先生樣に何かお考へあつてのことには違ひねえが、全くどうも不思議な代物だ。

村人一。おらにもさつぱり判らねえ。（足場の柱に双手をかけ、うんと言つて押す。茅の屋根、ぐらぐらと搖れる）

村人二。危ねえ、何をする。（驚いて止め）莫迦な眞似はしねえもんだ。

勘右衛門。勇助、ゐるか。勇助。

勇　助。へい、こゝにをります。（人を分けて出る）

勘右衛門。準備の出來上つたことを、誰か先生へお知らせに行つたか。

勇　助。寸七と新吉の二人が、お迎えに出ました。もう追付けお見えになると思ひますがね。何だつたら、おいらがもう一度、行つてきませうか。

勘右衛門。なに、いゝんだ〳〵。誰か行つてりやそれでいゝんだ。所でなう專右衛門さん。

專右衛門。はい〳〵。

勘右衛門。あの屋根のやうな物ですが、ありや一體、何にするのでございませうかな。

專右衛門。（首をひねり）さあ、私にも、皆目見當がつきませんね。何しろ設計書にだつて、出てゐない物ですから。

勇　助。おゝ、名主樣、あれへ先生樣がおいでなさいましたよ。

一　同。先生樣だ。先生樣だ。（騒ぐ）

（尊德、ニコ〳〵しながら、寸七、新吉と共にくる。一同鎭まる）

尊　徳。うむ、すつかり出來上つてをるな。ご苦勞〳〵。（足場の具合や、眞下の川面の逆卷く水勢の有樣など、仔細に調べ）よし〳〵、これで結構だ。

重左衛門。先生。お伺ひ致しますが、あれなる茅葺の物は、如何致しますのでございませう。

尊　徳。あれか、は〻〻、妙な物であらうがな。あれは、これから、川底へ切つて落すのだよ。

重左衛門。えッ。川底へあの、切つて落すのでございますか。（一同驚き呆れて、再び騷ぎ立つ）

尊　徳。この川底は、質が砂土である爲に、水が皆地底へ吸込まれてしまふ。今迄年毎に堰の修復を繰返さねばならなかつたのもつまりは、その爲なのだ。そこでこの茅葺を埋め洩水を防止するといふ、わし獨特の方法だ。

重左衛門。併し、あれを、どうして切り落しますのでございませうか……

尊　徳。譯はないさ。誰かあの茅葺の頂上へ登つていつて、支えの綱を切り放せばよいのだ。そして後から、木や石を皆して、どん〳〵投込むのだ。

重右衛門。でもございませうが、先生、あの頂上へと申しましても、それはとても危くつて……

尊　徳。なに、心してやれば、決して危險なことはない。これ〳〵誰か、あの上へ登つていつて綱を切つてこい。

（一同、わあ〳〵とどよめき、怖氣をふるつて、互に尻込みする）

尊　徳。（笑つて）これは亦、どうしたといふ事だ。何もそんなに怖いことではない。綱を切り終つて、茅葺が落下する直前、素迅く、堤の方へ飛移ればいゝのだ。どうだ、誰かやつてみろ。誰か、やる者はをらぬか。

村人三。彌六。おめえ、やらねえか。

村人四。（眼を怒らし）これ、何を吐かしくさる。あのぐら〳〵ゆれる茅葺の上で、そんな離業（はなれわざ）が出來るものか。ひとになど勸めねえで、おめえこそやつてみろ。

村人三。駄目だ、おら。何せ、年寄つた阿母（おふくろ）がゐるでなう。

尊　徳。判らぬ奴だ。落着いてやれば、決して危險なことはないと言ふてをるではないか。物

事は怖れたり慌てたりすれば危險でないことも危險になる。膽を据えて掛れば何でもない。さあ、どうだ、誰かやらぬか。

一同。（いよ〳〵尻込みする）

尊　徳。なんだ、こんなに頭數が揃つてをるくせに、何れも腰拔ばかりか。呆れたものだ。

村人一。でも、どう考へても、やつぱり危ねえです。あそこへ登つて綱を切つたら、あれと一緒に、川の下の深えところへ、眞逆樣に落ちゝまひます。

喜　助。だが、そんなことを言つてちや際限がねえ。いつそかうしたらどうだ。甲乙なしに籤で人柱を決めやうぢやねえか。

（人々は、籤だ、人柱だ、人柱だと、怖れ騷ぐ）

尊　徳。（つひに怒り）默れ、このたはけ者！（勇助、外一同縮み上る）これしきのことに籤の人柱のと、何といふ仰々しい口をきくか。控えろ。お前らは臆病風にとらはれて、このわしの申すことも耳に入らぬと見えた。よし、この上はもう誰にも頼まぬ。わしが自分で切り落す。（いきなり、羽織をかなぐり捨てゝ出る。周圍の人々大いに驚き狼狽して四方よりとりすがつて止める）えい、放せ、放せ。

勘右衛門。ま、まつて下さいまし、先生。それは不可ませぬ。それは不可ませぬ。

尊　徳。心配はいらん。退け退け。こ、これ、岸右衛門、何をする。

岸右衛門。（背後より懸命に抱き止めながら）何をするつて、うゝ、先生樣こそ、何をする！　とんでもねえことです。不可ねえ、そりやならねえ。

尊　徳。放せ放せ。わしがやらねば、誰もやる者はないではないか。大事ないことだ。えい、放せと申すに。

岸右衛門。わつ、皆止めてくれ。先生樣をとめてくれ。止めてくれい。

尊　徳。邪魔だてするな。皆、そこで見物せい。

（尊徳、岸右衛門を振り放し、いきなり腰の小刀を拔く。人々わつとひるんで散る際に、尊徳

は、抜いた小刀をしつかり口に銜へ、ひらりと身を躍らせて、堤から足場へ渡り、ぐら〳〵ゆれる茅葺の上へとりつき、少しづつ登つてゆく。岸右衛門起上り、夢中で跡を追はんとして人々に抱きとめられる。岸右衛門身をもだへ、狂氣の如く叫びつゞける。）

（尊徳は、人々があれよ〳〵と喚く中を、つひに茅葺の頂上に達する。そして注意深く、支えの綱の一本を切る。茅葺は尊徳を振り落さうとする如く大きくぐら〳〵とゆれる。次の一本を切り次の一本と、順次に綱を切つてゆく。その度毎に、ぐら〳〵とゆれ、人々は悲鳴に似た叫びをあげながら、手に汗を握つて眺めてゐる）

（尊徳はつひに最後の支綱をブツツリと斷つ。その刹那に茅葺は、豪然たる響を殘して、數丈眞下の川中へ墜落してゆく。間一髪、尊徳はひらりと足場から堤上へ飛移る。そして、茫然と立ちつくす一同へ叫ぶ）

尊　徳。それッ、石だ。木だ。ぼんやりしてをらずと、どん〳〵投げ込め。石を投げろ、木を擲り込め。

（人々、夢から覺めし如く、慌てゝ我がちにと、石や木を拾つて、川下めがけて、投げこみ始める。尊徳、勵まし續ける。――間――）

尊　徳。よし。やめろ。もうよし。充分だ。――うむ、出來た。これでよいのだ。（ホッと、額の汗を拭ふ）一同の者、ご苦勞であつた。これで、青木村の用水は永代順調にゆくことであらう。先づは目出たい。

事右衛門。外人足一同　お目出たうございます。

（村の者一同、わつと歡聲をあげ、口々に禮を述べる。勘右衛門と重左衛門は流石に慚愧にたへぬものの如く、さし俯いたまゝでゐる）

二　宮　尊　徳

勘右衛門。先生、お許し下さいまし。（ぬかづいて）この身の不甲斐なさ、意氣地なさを、あゝ、全く、申譯ございません。

重左衛門。（同じくひれ伏し）茅葺の網まで、先生にお切らせした私共――こればかりは、一生悔ひても悔ひ足りませぬ。お許し下さいまし。お許し下さいまし。

尊　徳。これ〳〵立て。この目出たい中に。む？　はゝゝ、わしは何とも思つてをりはせぬ。併し兩人、すべて事を爲し遂げるには一身を張つて掛かる氣組を持たねばならぬ。よいか。

勘右衛門。
重左衛門。何とも、申譯ございませぬ。お詫びの申上げやうもございませぬ。

尊　徳。もうよい。それよりもこの目出たい日を、お前ら二人が先へ立つて祝はねばならぬ。今宵は一同を、勘右衛門の家へ招いて心ばかりの酒盛でもやつたがよい。

勘右衛門。はい、はい。是非左樣致します。そして、先生の今日までのご厚恩に對しまして、村方一同出揃ひました上、改めて、お禮の言葉を申上げたうございます。

尊　徳。はゝゝ、それは有難う。

（その時、櫻町陣屋勤番の豐田正作が、村の子供ら二三人の案内で慌だしく出る）

豐　田。おゝ先生、こゝにおいでございましたな。

尊　徳。豐田か。いかにしてこゝへはこられた。何か急な用件でも起つたのか。

豐　田。はい。實は…（眉をひそめ）横山氏の容態が急變致しましたため、とるものもとりあへずお知らせに上りました譯でございます。

專右衛門。（色を失ひ）なに横山樣が。横山樣の容態が急變とござりますか。

豐　田。はい……。先生、もし御手都合がつきますなれば、直ちに御歸村願ひますれば、横山氏もどのやうに喜ばれるか判りませねば。

尊　徳。――歸る。直ちに歸りませう。（言葉忙しく）して、醫者の診斷はどうであつた。まだ、まだ大事ないか。大事ないか。

豐　田。はい。しかし……なるべく早く御歸村が願ひたう存じます。馬の用意もととのへてまゐりました。

尊　德。うむ。うむ。では直ぐまゐる。（勘右衞門らへ）一同、今聽いたとほりだ。わしとても、こゝまで見屆けた上は、最早あとに心にかゝることもなし、一同と共に打寛いで一夕を過ごしてゆきたかつたが、それもならぬ。

一　同。（頭を垂れて聲なし）

尊　德。かういふ間にも氣が急く。豐田、ご苦勞ながら、馬をこれへ。

豐　田。はつ。

（豐田急ぎ去る。專右衞門と忠右衞門それにつゞく）

尊　德。（獨白。悲痛に）横山。待つてをれ。そなたもこの川普請については我事のやうに心にかけてをつたが……見せてやれぬが殘念なう。……殘念だ。

（尊德、涙を見せまいとするやうに、陽炎もゆる堤の上をひつそりと頭を垂れてゐる人々から離れてひとり向ふを向いて立つ。馬のいなゝき近く聽こえる）

――靜かに、幕――

源平鎌倉記

（三幕）

——頼朝と重衡——

序幕　源　頼朝の屋形

二番目　狩野介宿所内、平重衡の居室

大詰　源　頼朝の屋形
同じく、南御門前

登場人物

源頼朝　源義經　平重衡　平宗盛　平清宗　千手前　侍女榊葉　北條時政　大江廣元

齋院次官親義　一法昌寛　梶原平三景時　狩野介宗茂　比企藤四郎能員　伊勢三郎義盛　畠山庄司重忠　土肥次郎實平　重衡舎人石金丸　藏人大夫親房

――その他、虜られし平家の人々、諸國の大名、郎黨、侍女、南都の衆徒、警固の侍、山伏、法師、見物の群衆など、多勢。

序幕

源頼朝の屋形。

頼朝は、澁塗の立烏帽子に白の直垂といふ正裝で、御簾を半に揚げさせた寢殿にゆつたりと着座し、南都の衆徒の退出に引續き、寢殿に續く内侍に、威儀を正して控えてゐた諸國の大名たちが、次々に拜禮して退出してゆくのへ、一々鷹揚に會釋をしてゐる。

時は、壽永三年三月のある日――

過ぎし二月七日の一谷の合戰で虜つた、三位中將平重衡を、南都炎上といふ大罪を犯した佛敵として、その身柄を、南都大衆の手へ引渡して貰ひたいと陳情にやつてきた、興福寺東大寺代表六人の衆徒と、今對面を終つたばかりのところである。

御前には、齋院次官親義、梶原平三景時、一法昌寛の三人が殘る。

頼　朝。やあ、疲れた疲れた。（伸をして、姿勢を崩す）どうもこの、儀式張つたことだの、長い間行儀をよくしてゐることだのといふことは、おれの性に合はん。わは〻〻。おい、おまへらもそんな隅の方に鯱鉾張つてゐないで、もつと近く寄れ。

景　時。恐れ入ります。

昌　寛。有難う存じます。

親　義。――では、お言葉に甘へまして、ご免を蒙ります。

頼　朝。時に、どうだ、南都の山法師輩の、あの押の強さは、む？　この兵衛佐頼朝を向ふに廻し、眞正面から小煩い理窟をこねて、喰つてかゝつてきたぢやないか。

昌　寛。流石、音に聽こえた荒法師共の面魂、吾々も些か、顏負いたしましてございます。

頼　朝。（苦笑しながら）坊主などといふものは、悟をひらいてゐる人間なのだから、もつとあつさりとして、諦めのいゝものかと思つてゐたが……奴輩、案外に執拗なので、おれは呆れてしまつたぞ。

景　時。事柄が事柄でございますからな。伽藍といふ伽藍は燒討を喰はされる。何萬卷といふ經文は、ことごとく灰にされる。大佛の首は打落される。その上、仲間の僧共を二百人の餘も、なぶり殺しの目に會はされたのでございます。その怨恨も、骨髓に徹してをりませう。三位中將樣のお身柄を渡してやらない以上、彼等は、一歩も退かないに違ひありません。

頼　朝。（氣色を損じた顏付で）何もおれは、中將殿を、あの山法師輩に、渡してやらないとは言ひはせん。――が、渡してやらうとも、今は考へてゐないのだ。

景　時。はて、少々ご心底のほどが判りませんな。――殿は一體、では何のために、わざ〳〵三位中將樣を、當鎌倉へ下向仰せつけになつたのでございますか。

頼　朝。（性急に、扇で絕えずそこらを叩いたりしながら）何のためにと言つて、別に、何のためにでもない。たゞ、中將殿は故清盛入道の第四子だし、京洛でも評判の風流男子だといふから、どんな男か一度見てやりたいと思つて、それで、鎌倉へ廻せと命じたまでのことさ。

景　時。すると、侍所別當和田義盛殿の手に廻した上で、頸を刎ねる、といふご所存でもな

いのでございますか。

頼朝。あるひは、さうすることになるかも知れんが、まだ、そこまで考へてもゐない。が、誰がそんなことを、おまへに喋つた。

景時。（得たりといふ思ひ入れで）義經樣が、仰せになりましてございます。

頼朝。なに、義經が。

景時。京洛で、三位中將樣御下向のご守護の役を、私に仰せつけになりました時でございました。重衡卿は、一谷合戰たゞ一人の生捕だ。兄上はきつと、世間への見せしめのために、鎌倉へひいて斬るのだと、かう仰せになつておいでございました。

頼朝。ふむ、そんなことを弟が言つたか。相變らず當推量の出しやばり口を叩く奴だ。——おまへではないが、あの弟は、このまゝ放擲つておくと、今におれを差置いて、何をしでかすか判らんぞ。範頼と異つて、度胸骨が太いだけに、油斷がならぬといふものだ。（短い沈思の後）——さてと、そこであの南都の山法師輩のことだが、奴輩は、この兵衛佐頼朝を、何と心得てゐるのだらう。このおれに向つて、怖氣もないあの態度

といふものは、陳情ではなくて、まるで談判ぢやないか。——奴輩、おれに楯を突くことが、どんなに恐しい結果を招くか、そこに氣が付かんのかな。それとも奴輩は井の中の蛙大海を知らずで、この頼朝を、單に源家の嫡流で、關東武士の頭領だくらひに輕く見て、多寡をくゝつてゐるのかな。

景時。さあ、どんなものでございませうか。人の心の奥は、判りませんが。

頼朝。もしさうだとしたら、おれにも考へがあるぞ。中將殿の身柄を渡してやらぬは勿論、奴輩六人の坊主首に、一つ一つ縄をかけて、鎌倉中を引廻した上、彼方の屏風山の頂上へでもズラリと並べて、順々に斬殺してくれるわ。

昌寛。（蒼くなり）これはまた我君、本心でそんな恐しいことを、仰せになるのでございますか。

頼朝。本心だとも。この頼朝に逆ふ奴は、味方であらうと、誰であらうと、斷じて許してはおかんのだ。

昌寛。恐れ入ります。しかし我君、彼等衆徒は、御佛へ仕へまつる者でございます。

頼朝　おまへは坊主あがりだから、二言目には直ぐ、御佛だとか佛弟子だとか、事々しく言ふが、おれに崇をする佛なら、その場で打毀してしまふ。また、おれに反向ふ坊主共なら、明日とは言はず斬殺してしまふのだ。

昌寛　はい。はい。しかし殿、私は殿の御爲を思へばこそ、かうして重ねて申上げるのでございますが、佛徒に害を及ぼすやうなことがございましては、第一、爲政のご趣旨にも反しますし、ひいては、天下の人心これがために離反いたしますことになるは、まことに火を見るよりも明かなことでございます。この度の三位中將樣といひ、また近い昔にも、その例はいくらもあることでございます。

頼朝　えゝ、もうよせよせ。おまへの說敎など聽きたくはない。——いやどうも、今日は朝ツばらから、よく〳〵坊主に崇られる日だ。はゝゝゝ。——ところで、今後の中將殿の處置については、どういふ風にするのが一番いゝか、景時、おまへの意見は、どうだな。

景時　南都炎上に至つたのは、たとへ故入道相國の命令であつて、三位中將樣ご自身の意志ではなかつたにせよ、當面の責任者である事實は、嚴として否定することは出來ません。されば、衆徒の願ひをお聽許になつて、三位中將樣のお身柄を彼等の手へお渡しになつたとしても、それが、殿のご威光を損ずることには決してならないと、私は思ひます。

頼朝　ふむ。ふむ。(間)だが、それでは何だか——どうもおれの方が、みすみすあの山法師輩に言ひ負けたやうで、面白くないな。

景時　過ぐる三月十日、京洛を發つて三條を東へ、白川、四ノ宮河原を越え、大津の浦から粟津ヶ原にさしかゝつた頃から、あの六人の法師共は、まるで待合はせてでもゐたやうに、ひよつくり同じ道へ出てきて、それからはずつと私共の跡から跟いてまゐりました。そこで私は、彼等の考へを知つておくのも無駄ではなからうと思ひまして、心利いた者をやつて、こつそりと樣子を探つてみますと、彼等は、鎌倉殿へ重衡卿の身柄を請ひ奉つてみて、もし不幸にして願ひが容れられなかつたその時は、生きて再び、興福寺東大寺が山門の下はくぐるまいぞ、と堅く誓ひ合つてゐたと申します。

頼朝　(內心些か驚きながらも、面には笑ひをうかべて)なるほど。そこまで決心して出てきたか。

さう聽くと、無下に奴輩の願ひを退けてしまふのも、ちと可哀さうな氣もする。親義、おまへはどう思ふ。

親義。 はい。六人の衆徒の言分も、南都側としては、無理からぬことだとは思へます。しかし重衡卿は元々、朝敵として捕えたものであります。されば佛敵としての罪は第二義的の問題であり、また情の上から申しましても、あくまで重衡卿を彼等の手にお渡しにならぬのが、正當であり、武士道の至上であると存じます。

景時。（白い眼をして）親義殿。ではあなたは、私の意見が、武士道に外れてゐるとでも仰有るのですか。

親義。 そんなことを申した覺えはありませんが。（と、靜かな微笑で一蹴し）南都炎上のことにつきましては、去る三月二十七日、當御屋形において、重衡卿が殿とご對面のみぎり、――公に仕へ、世に隨ふならひ、王命と申し父命と申し、衆徒の惡行を鎭めやうために、止むなく兵を向けしところ、測らざるに伽藍の滅亡に及ぼせしことは、重衡の力の足らなかつた所以であつたと、涙を流して後悔しておいでになりました。この上は、あの節重衡卿が頻りにお望みになつたやうに、出家することをお許しになるか、それがどうしても許せぬとあれば、せめて源家の刄で、ひそかに頸を刎ねて差上げてこそ、まこと武門の情とこそ存じます。

頼朝。 なるほど。おまへの考へも間違つてはをらん。――さてと、これは何方にしたものか。（沈思）いや、どうも今日は巧く考へが纏まらんぞ。（後頭部を、さかんに扇で叩く）――何しろおれは、官位を拜し、朝敵追討の有難い院宣を賜つてゐる身だからな。假にも威光を失墜するやうなことをしては、院の思召にも背くこととなる。一方にはまた、朝敵平氏一門が專横榮華を極め、上下の怨恨を買つてくつがへつたのに鑑みて、敬神崇佛尊皇、節儉の旗印をかゝげて善政を施き、質實剛健の風を養ひ、正しい武士道精神の鼓吹に努めてゐるそのおれが、自らその主義を破つたのでは、しめしがつかん。さつき昌寛の言つたとほり、今人心の離反を招くやうなことにでもなつては、天下統一といふ雄大な希望は、半で坐折してしまふに決つてゐる。うむ、弱つた。まつたく弱つた。何方にしたものか。（到頭立上り、考へあぐねた顏をして、性急にそこらを歩き廻る）

昌　寛。いつそ矢張、明日ご評定をおひらきになつて、その上で御決定になつては、如何でございませう。

頼　朝。莫迦を言へ。いくらむづかしい問題だと言つても、多寡が平家の虜一人の身のふり方を、おれ一人で決め切れず、麗々と一同に相談するなど、そんなことが出來るものか。

親　義。殿のご氣性としては、さうでもございませうが、このことは、獨斷でお決めになるのは、危險でございませう。やはり、此方の腹を決めておいた上で、一應京都のご意向をおうかゞひ申上げて決するのが、一番上分別だと存じますが。

頼　朝。うむ。おれもそれを考へないではないが……（元の座に戻りながら）まだ完全に平家追討を終つたといふ譯ではないから、中途で、こんなことを一々京都へ申上げるのもどうかと思ふのだ。それから、おれのもう一つの大きな頭痛の種は、一谷から屋島へ追ひ詰めてしまつた平家の問題についてなのだが——

景　時。さやうでございます。平家の總大將宗盛卿は、おろか者の標本で、これは取るに足らぬ相手といたしましても、一谷を逃れて屋島へ渡りました平家生殘りの公達の中には知盛卿のやうな勇士がをり、教盛卿のやうな智者がゐて、こゝを先途と、一門一族が死物狂ひで反抗いたしてをりますから、攻手のわが範頼樣にしても、義經樣にしても、中々にお骨の折れることと、お察ししてをります。私も、重衡卿道中ご守護の役も、これで無事に果したのでございますから、早速また出發いたしまして、屋島の合戰へ加はりたいと思ひます。

頼　朝。よしよし。行くがいゝ。だが、合戰の勝敗については、大事ないことなのだ。どうせ最早、先は見えてゐる。平家がどんなにもがかうとも、あと一年と保ちはしまい。おれの心配してゐるのは、そのことではない。あの義經が血氣にはやつて、短兵急に攻めたてたりして、もし平家の者共が、袋の鼠といつた捨鉢な氣持から、一門こぞつて、西海の藻屑と消えるやうなことになつては、取返しのつかん瑕となつてしまふ。と言ふのが、一同も知つてをるやうに、事なく迎へ取らねばならぬお仁もまざつてをるからな。

景　時。そのことなら、この景時に目付役仰せ下さればわるいやうにはいたしませぬが。

頼　朝。ふむ。だが、義經がお前のいふことを用ひるか。

景　時。（ニヤリとして）私の申上げることはお用ひにならぬかも知れませぬが……殿のお言葉とあれば、まさかにお叛きにはなりますまい。

親　義。（思はず吐息を洩らし）まことに、あれやこれやと、殿のご心勞も、並大抵のことではございません。

頼　朝。いや、まつたく並大抵のことではない。おれのこの大頭が、いくつあつても足りぬほどだ。だがおれは、これで滿足なのだ。嬉しいのだ。愉快なのだ。實に、愉快なのだ。おれの苦勞は、誰にでも出來る苦勞ぢやない。して見たいと思つても出來る苦勞ぢやない。おれの苦勞は、一つ一つ、どれもこれもみんな、仕榮のする苦勞ばかりぢやないか。はゝゝゝ。

昌　寛。仰せのとほりでございます。所謂、偉大な建設者の苦勞とでも申しませうか……

頼　朝。ふゝ、坊主中々うまいことを言ふぞ。――だがこれで今日、國々は略、わが白旗の下に靡いてきたとは言へ、中には未だに詩歌管絃に明暮の赤旗の御世を、慕ひなつかしんでゐる大名も少くはないのだ。こゝで假に、屋島の形勢が平家に有利に轉回したとしてみろ、忽ち白旗にそむいて、鉾を向けかへてくる奴も、きつと出てくると思ふ。いつの世にも、信義とか、誠實とか、そんなことよりも、先づ、時代のながれにうまく乘り、威勢の大にこびへつらひ、一身の安全と榮達のことばかり考へてゐるやうな人間が、一等多いものだ。

（親義、ちらりと、景時を顧る。景時、澁ッぽい顔をして、外方を向き、庭園の方を眺めたりしてゐる）

頼　朝。おれのことを、頼朝は幼少の頃から生死の境に育ち、親兄弟には生別死別して緣が薄く、その上、長い間、敵國の中に暮し續けてきたものだから、それであんなに根性がひねくれてゐるのだとか、おそろしく自我が強くて性急なのだとか、とても出駄羅目

で疑り深いのだとか、色々と蔭口をきいてゐる者があるのを、おれは、ちやんと知つてゐるが……かうした時勢に、だれが頭から眞直に、自分以外の人間を信用出來るものか。おれは、さう思つてゐるのだ。おれは、だから、いつでも、敵の白刃に圍まれた座についてゐる氣持で、油斷なく暮してゐるのだ。

（この時、侍臣くる）

侍臣。申上げます。只今狩野介宗茂樣、ご參殿でございます。

頼朝。なに、宗茂がきたか。よしよし、すぐこゝへこいと言へ。

侍臣。畏りましてございます。（急いで去る）

頼朝。宗茂が、中將殿の行狀報告にやつてきたぞ。あはゝゝゝ。だが親義、昨夜は中々面白かつたぢやないか、む？　はゝゝ。――あれから先、どんな風にあの酒宴が……と言ふより、中將殿と千手の仲が進展したが、早く知りたいものだと、實はおれは今朝から宗茂のやつてくるのを待遠しく思つてゐたのだ。

親義。これは、おひとが惡い。しかし、重衡卿は流石に無双の能者でございます。あの琵琶の音など、哀々切々として聽く人の心に迫り、まことに涙を誘はれないではゐられなかつたではございませんか。

頼朝。おれには、琵琶の音の良否など判らなかつたが、こつそり他人の酒宴を覗見する氣持など、ちよつと味はへん乙なものだと思つた。（間）――だが中將殿も、捕虜の身に、千手のやうな、あんな美しい女を贈られて、心中さぞ目を圓くしてゐることだらうな

頼朝は、軍と狩のことより外、何も知らぬ無粹者かとばかり思つてゐたら、こりや案外さばけたところのある、話せる男だと、中將殿思つてゐはせぬかな、ふゝ、どうだ

景時。景時。いうにやさしいお心づくしかなと、嬉しくも有難くお思ひになつてゐらつしやることでございませう。

（狩野介宗茂、くる）

頼　朝。やあ、宗茂。待ちかねた待ちかねた。もつと、進め、近くこい。

宗　茂。はい。（進み、一同とも叮重に目禮を交す）

頼　朝。して、昨夜はあれから、どうした。

宗　茂。はい。中將樣はご機嫌よく、曉方まで、酒宴の席においでになりましてございます。

頼　朝　さうか。で、このおれと、親義とが、おまへの宿所の後園に忍んでゐて、中將殿のなさる琵琶を聽いてゐたことは、氣が付かれはしなかつただらうな。

宗　茂。それはもう、中將樣を始め、千手さまも、また私方の郎黨たちさへも、氣が付きはしませんでしから、御安心下さいますやうす。

頼　朝。――中將殿は、千手と祿に言葉も交さぬやうに見受けられたが……あれで、どうなんだ。

宗　茂。はつ？

頼　朝。判らん奴だな。つまり、中將殿は千手を、氣に入つてゐるのかどうかと、おれは訊ねてゐるのだ。

宗　茂。はい。（困つたやうな笑ひ方をして）そのことは、のちほどにでも、どうぞ千手さまから直接お聽きとり願ひたう存じます。が、それにつきまして、夜が更け、土器が一巡いたした頃でございました。千手さまが、

一樹の蔭に宿り、一河の流を結ぶも、これ先世のちぎり――

といふ白拍子をなさいますと、中將樣が、

燈暗數行虞氏淚
夜深四面楚歌聲

といふ朗詠をお返しになりました。――それは恰度、障子の際間から風が吹き入りまして、中將樣の前にあつた燈が消えた時でございました。

頼　朝。待て待て。その、燈暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲、とは、どんな意味があるのだ。おい明經博士、おまへなら儒家だから判るだらう。說明してみてくれ。

親　義。はい。それは昔、唐土で、漢の高祖と楚の項羽とが、天下を爭つたことがございました。

頼　朝。ふむふむ。

親　義。兩者戰ひを交へること、七十二度に及んだと申しますが、その度毎に項羽が勝ちました。ところが、高祖の臣で韓信といふ大將軍が、謀をめぐらして、遂に項羽を擊破りました。項羽はそこで、騅といふ馬に乘つて逃れやうといたしましたが、どうしたことか、馬は身をふるつて、出やうとはいたしません。項羽は后の虞美人をかへりみて「天禍せず騅如何、天禍せず虞氏如何」と歎いて、たゞこの后虞氏に別れることばかりを悲しみました。燈の暗い下で、虞氏も餘りの心細さに、思はず涙をこぼしました。その時、夜もすでに更け、楚の陣へ討入つた漢の兵共が、韓信の謀にしたがつて、四方から楚の歌をうたひ始めました。項羽は自分の兵共が、故郷に思ひをいたして、それをうたつてゐるのだと思ひ、すでに自分には、自分の兵を動かす力もなくなつたと言つて泣きました。そこで、

燈暗數行虞氏淚
夜深四面楚歌聲

と申します。思ふに、その時の項羽にも似た敗殘の身にある重衡卿が、あかつきかけて、ふつと燈が消え、千手さまも歸られんと名殘を惜しまれ、千手さまを虞氏に見立てゝ、その朗詠をなされたものと思はれます。（そっと、涙を拭く）

（宗茂、昌寛、差俯いて、思はず歎息す。）

頼　朝。よく判つた。なるほど、さういふ心か。すると中將殿は、たしかに千手を氣に入つたのだぞ。どうだ一同、この頼朝、京洛にその名をうたはれた風流男子と、鎌倉隨一の美女のなかだちを、見事仕遂げた形だ。わはゝゝ、おれはいゝことをしたな。たしかにいゝことをしたぞ。（言ひかけて、急にだんまり込む。そして、暫時暗い顏をして何か考へ耽つてゐる。と思ふ間に、今度はいきなり立上る）一同、もう退つてよい。

景時。（驚き呆れ）これはまた殿、急にどうなされたといふのでございます。

親義。お、これは、私としたことが、とんだことをしてしまひました。重衡卿のお身の上に思ひ及びましたまゝ、殿の御前であることも忘れ、つひ涙をこぼしたりいたしましてさぞお目障りでございましたらう。どうぞ、お赦し願ひたう存じます。

頼朝。（手を振つて）いやいや、違ふ違ふ。それを咎めてではないのだ。なに、おれは今の話を聽いたら……何だか急に、經でも讀みたくなつてしまつたのだ。それで、持佛堂へゆく。（二足三足ゆきかけて、戻り）それから——宗茂。

宗茂。はい。

頼朝。そつはないだらうが、この上共によく氣を配り、中將殿をねんごろにもてなしてやつてくれ。よいか。

宗茂。委細承知仕りましてございます。決して疎かにはいたしません。

頼朝。うむ。

（頼朝、そのまゝ足早に奥へ入る。一同、平伏して見送る。麗かな陽射の庭前、寢殿正面に當る泉水が金銀の敷物を敷いたやうにキラ〳〵光つてゐる）

——幕——

二　幕　目

狩野介宗茂の宿所内、平重衡の居間にあてられた庭園に面した一室。

室は廣縁でめぐらされ、その廣縁の下手は渡廊下へ續く。

庭園には、小規模ながら、樹木、泉水、捨石などの配置よろしく、正面植込の彼方には築墻の内側が見えてゐる。

時は、第一幕より五ケ月經過――壽永三年七月中旬の、月の美しい夜である。

重衡は廣縁に出て、舍人石金丸が、蚊燻しのために、階の下へ松葉や木の枝などを集めてくすべてゐるのを、眺めてゐる。

かなり長い間を經てから――

重　衡。石金丸。

石金丸。はい。――何でございますか、中將樣。

重　衡。今夜もまた、徹宵飲み明かさうかの。

石金丸。でもございませうが、毎夜のやうにそれでは、第一、お體がたまりますまい。――それに、私はまあどうとしても、日夜のへだてなくお傍に仕えてゐらつしやる千手さまが、いくら何でも、ご迷惑でございませうに。

重　衡。だが、私は、眠るのが厭なのだ。恐しいのだ。眠ると、待つてでもゐたやうに、きつと惡夢が襲つてくる。（歎息、間。獨言のやうに）次々に燒け落ちてゆく伽藍、佛像、經卷の、その渦卷く焰の中から、山法師共の血みどろの首が、憤怒に燃える眼をカツと見開き、私の顏をめがけて、いくつも〳〵飛んでくるのだ。あゝ、考へただけでもおそろしい夢ばかりを見る。

石金丸。――

重　衡。昨夜などは、一谷で無念の討死をした叔父の薩摩守忠度だの、從兄弟の通盛だの、それから但馬守經正だのの亡靈が、どこからともなくやつてきて、さめ〳〵と泣きなが

ら、何やらくどくどと掻き口説き、その揚句の果には、一同總掛りで私を捕え、この口の中へ、色あせた赤旗を、後から後からぎゆうぎゆうと詰めこむのだ。あゝ、その苦しさ……（身ぶるひをする）

石金丸。だからと言つて、この上無理をお續けなされては、心は益ゝ亂れ、體は益ゝ弱つてゆくばかりでございます。（階を上つてくる）中將樣、まあ、あの澄み切つた月の色をごらんなさいませ。――如何でございます。一首お詠みになりましては。

重　衡。私に、そんな心の餘裕があると思つてゐるのか。愚者め。

石金丸。愚者、でございますか。

重　衡。さうだとも。複雜したこの苦惱が、單純に拭ひ去れるもののやうに心得て、月並ななぐさめ言を言ふやうな奴は、愚者に違ひないぢやないか。

石金丸。――お變りになりましたな、中將樣は。まるで昔とは別人のやうでございます。

重　衡。それは、私自身のせいぢやない。――しかし、鎌倉どのには、この重衡を、いつまで斯うして狩野介の宿所へ預つぱなしにしておくのであらう。

石金丸。東へ下つてまゐりましてから、もはや五月ほどになりますなう。

重　衡。しかも、女まで付けて優待してくれる。（冷笑）鎌倉どのは、それで、大いに度量の宏いことを、私に示してゐるつもりなのであらうが、些か見當外れの好意だといふより外はない。殺されるに決つた人間が、一思ひに殺されないで、一日延ばしに生永らへさせられてゐるほど、苦痛なことはない。拷問にかけて虐待するより、もつと酷いことなのだ。（間）あるひは、それを百も承知の上で、わざと斯うした扱ひをしてゐるのかも知れないぞ。なるべく長く生かしておいて、死への恐怖を強化させ、なるべく多く快樂を與へておいて、この世への執着を絶ち難いものとさせ、その頂點へ私が立至つた時に、息の根を止めてやらうと考へてゐるのかも知れない。飽くことのない殘虐性は源家の血統なのだから。

石金丸。當家の主宗茂殿の話では、かの南都の法師らが、ねばり强く、中將樣のお身柄引渡しを、鎌倉どのへ陳情してをりますさうでございますが。

重　衡。……私にとつては、何れにしても、死は免れぬよ。

（重衡、口を噤み、ほそ〳〵と立登る蚊燻の煙の行手を見詰めてゐる。長き間）

重　衡。石金丸。おまへ、さぞ京洛へかへりたいであらうな。

石金丸。（急所を突かれた形で狼狽し）は、はい、いえなに。

重　衡。ふん、何もそんなに隠さなくともいゝぢやないか。おまへの心ぐらひ、見透しのつかない私でもない。

石金丸。……

重　衡。おまへは、私の最期を見屆けてくるやうにと、八條院から命じられて、はる〳〵この私に跟いてやつてきたのだ。だから、一日も早く役目を濟まして、あのなつかしい故郷へ歸りたからう。妻や子と、お互に無事な顔を見合つて、喜びたいに決つてゐる。ところが生憎、このとほり、私の身の處置は長びいてゐる。決るまで、この先どれだけ日數がかゝるか判らない。この死損ひめ、頸を斬られるなり、南都へ引渡されるなり、どうとも早くすればいゝのに、きつとおまへは心でさう思つてゐるに違ひない。

石金丸。（涙ぐみ）中將樣。あなた樣は、私の性質をよくご存知の筈でございます。何とも申上げません、お氣の濟むやうにお考へなされませ。

重　衡。おまへには、再び京洛へ歸れるといふ當がある。この不運な重衡のことを考へたら、贅澤な希望など捨てゝ、半年と一年我慢してゐたつて、罰も當るまいと言ふものぢやないか。

石金丸。不運と仰有れば、まことにあなたさまほど不運な方はございません。都においでになりましたあの頃には、御所での御氣色も他に勝れ、上下の人々からは、めでたくもてはやされて、目を驚かすばかり派手な、お暮しやうをなさつてゐらつしやいましたものを。

重　衡。その都も今は遠く屋島の浦に成果てて、一門一族はちり〳〵ばら〳〵だ。まつたく人の運命ほど、判らぬものはない。（暗然たる思入れ）それにつけても、せめて妻大納言佐の消息だけでも、風の便りに聽けぬものか。

石金丸。やはりお忘れではありませんでしたな。――中將樣が北の御方のことを、口にお出しになつたのは、鎌倉へきてから、今夜が始めてでございましたぞ。

重　衡。高慢で、嫉妬深くて、手に負えない女だつたが、妻と名がつけば、他の女共とは、また別なものだ。私がこゝへきてから幾日も經たないある夜の酒宴の席で、千手どのの今樣の後、私が燈暗數行處氏涙といふ朗詠をやつたことがあるが、あれは、ふいにあの時、屋島に殘した妻のことを思ひ出したので、それで、あの朗詠をやつた譯なのだ。（間。低く）燈暗數行處氏涙、夜深四面楚歌聲――

（この時、渡廊下の彼方より、狩野介宿所の侍女數名、手に手に瓶子、土器、海山の手料理を盛りあげた高坏など捧げて、賑やかにくる。石金丸、慌てゝ涙を拭ひ、後を向き、燈の芯など掻き立てる）

侍女甲。お待たせいたしましてございます。

侍女乙。千手さまも、お湯浴がお濟みになりましたから、もう直ぐこちらへ、お見えになります。

重　衡。さうか。して、狩野介どのは、まだ鎌倉どの御屋形から退られぬのかな。

侍女丙。はい。今日もご評定があるとかで、お戻りは遲くならうとのことでございます。

重　衡。ご精勵だな。戻られたら、一獻お相手をしたいからと傳へてくれ。

侍女丙。申しきけますでございます。

（侍女一同、去る。長き間）

重　衡。飲んで、醉つて、何も彼も忘れやう。さうだ。これ石金丸、石金丸、今夜は寢かさないぞ、いゝか。はゝゝゝ。

石金丸。それは構ひませんが、例の方は、お手柔かにお願ひいたしたう存じます、はゝゝ。この石金丸、頭に霜を置くとは謂へ、體内には、まだ〳〵熱い血潮が波打つて流れてゐ

るといふものでございます。

重　衡。はゝゝ、これはよかつたぞ。（高坏から乾魚を一尾摘み上げて食ひながら）しかし、千手前といふ女は、なかなか好ましい女だ。

石金丸。二十一歳――でございましたつけな。

重　衡。東に、あんな優雅な女がゐやうとは、まつたく思ひがけないことだつた。頼朝も、そのつもりで、どんなものだとばかり、鼻高々であの女を寄越したに違ひない。

石金丸。そして、十六の年から、佐殿の、第一の寵妾だつたのださうでございます。

重　衡。（唇角に薄ら笑ひを見せて）大事ないであらうか。

石金丸。（クスッと笑ひ返し）そんなにお氣にかゝるのでしたら、いつそ、手をお引きなさいませ。

重　衡。はゝゝ、おまへは、なかなか意地のわるいところがある。頼朝は嫉妬深い男と聞く。あゝして女を寄越しておいても、いつまた氣が變らないものでもない。その時になつて……しかし、今となつては、手を引いても遲からうし、また手を引けない氣持に、

私はなつてゐる。

石金丸。これは、ご冗談を。中將樣ともあらうお方が。はゝゝゝ。

重　衡。いや、ほんたうなのだ。もし頼朝があの女を返せと言つたら、私は返さないと言つて爭ふかも知れない。

石金丸。いやはや、呆れましたな。

重　衡。私も最初の頃はあの女を、いつものでんで、輕くあしらつてゐた。ところが、女のあたゝかい眞心が一つ一つ私の心に觸れてくる毎に、あしらつてゐるつもりでゐながらいつか眞劍になつてゐる自分を見る。この勝負はどうやら、私の負けらしいぞ。

（千手前、目結の帷に白い裳を着て、涼やかに扮ち、侍女榊葉をしたがへて、靜かに渡廊下よりくる。石金丸、重衡の袖をひき、目顔で、それと知らせる）

千手前。重衡さま。そこで、何をしてゐらつしやいますの。

重　衡。（ニッコリして見せ）月を眺めてゐます。

千手前。月を眺めたりすると、哀しいことばかり思ひ出して、いけないのではありませんか。

でも今夜の月は、ほんたうにいゝ月ですこと。

重　衡。おつと、あなたは、月なんか、見たりしない方がいゝ。

千手前。まあ、それはなぜでせう。（美しい微笑と共に重衡の傍に坐り）妾は何を見たつて、嬉しいものばかりですのに。

重　衡。いや、月があなたの美しさを、妬むといけないから。

千手前。ホ、、、あんなことを。重衡さま。今宵は、大さうはしやいでゐらつしやいますのね。

重　衡。歎いてばかりゐたつて、どうにもならないではありませんか。

千手前。さう仰有つてゐらつしやる時は、實は一ばん哀しみ、悶えてゐらつしやるのではないでせうか。

重　衡。あるひは、さうかも知れません。（土器の酒を、一息にあふる）

（石金丸は、榊葉の酌に恐縮しながらも、さつきから、無言で飲んでゐる。築墻の彼方を、美しい笛の音がゆく）

重　衡。おゝ、だれか、笛を吹いてとほる者がある。

千手前。月の美しさに誘はれて、涼しい小路から小路を、うかれ歩いてゐるのでせう。

重　衡。（耳をすます。やゝあつて）あゝ、何といふ伸々とした、冴えた音色であらう。——あの笛の主は、きつと、心に何の哀しみも不安も、怖れもない、しあはせな人に違ひない。

千手前。あなたさまも、お心の持ちやう一つでは、あの笛の主のやうに、澄切つたお氣持になれるのではないでせうか。と、私は思ひますけれど。

重　衡。いや、私には、それは望み得ないことです。現在の私の心は、恰度、打碎かれた玻璃の鏡のやうなものなのです。

千手前。では、人の力では及びませんね。廣大無邊なみ佛のご慈悲におすがりなさるより外はありません。

重　衡。（冷く笑つて）それも、駄目です。千手どの、實は私が東へ下つてくる時でしたが、情厚い義經どのの計ひで、黒谷の法然上人に會はせて貰ひました。その時、上人は、彌陀の本願、念佛の一行ほど、世に尊いものはない。一聲稱念罪皆除と言づて、南無阿彌陀佛と一聲念ずる間に、よく八十億劫の生死の罪を滅すと仰せられました。そこで私は、これこそ、世から人から捨てられた自分に、たゞ一つ殘された救ひの手ではないか、さう思つて、それからといふもの、この鎌倉へ着くまで、馬にゆられてゐる時でも、旅宿に落着いた時でも、起きてゐる間は、念佛ばかり唱えてゐました。ところが、頭の中の妄念はそれとはまるで別々の力で、いよいよ増大してゆくばかりでした。哀しみは募つてくる一方です。死への恐怖も、じつとしてゐられないくらひ、高鳴つてきます。この世のありとあらゆるものへの執着は、壓倒的な勢ひで盛上つてくるばかりです。そこで、よく考へてみれば、私は自分が今必死になつてすがらうとする佛の、伽藍や尊像や經卷を火にかけた大罪人だつたではありませんか。私は自分の蟲のよさに呆れ返つて、おかしくさへなつてしまひました。そこで、それつきり念佛はやめてしまつたのです。はゝゝ。——つまらない、もうそんな話はやめませう。酒を波々と注いで下さい。それから、暫くぶりでひとつ、琴でも聽かせて下さいませんか。

千手前。それが、少しでも重衡さまのお心をなぐさめることになるのでしたら、よろこんでいたします。

重　衡。これは有難い。これ石金丸、石金丸。

（振向けば、石金丸はいつの間にやら、肱を枕にして眠り、榊葉がひとり、所在なささうに、燈の影に坐つてゐる）

重　衡。はて、石金丸は最早たべ醉ふて寢入つてしまつたさうな。榊葉、おまへも退屈させてしまつて、氣の毒だつた。どうか赦してくれ。

榊　葉。まあ、中將樣、そのやうなこと。

千手前。ほんたうに、眠くなつてしまつたらうね。ホ、、。

榊　葉。いゝえ。どういたしまして。

千手前。さうさう、おまへご苦勞でも、こゝへ、琴を運んできておくれでないか。

榊　葉。はいはい、畏りましてございます。（去る）

（重衡と千手前の眼が合ふ。千手前、羞笑を含んで、靜かに視線をおとす。——間——）

重　衡。なう、千手どの。

千手前。はい。

重　衡。荒い風の吹く阪東の野に咲いた、一輪の優しい花。

千手前。え？

重　衡。それが、あなただ。それが、あなたなのだ。——手折つた私は、いつまでも、その美しい花を胸へ抱きしめてゐることを許されぬ、果敢ないあの世への旅人。

千手前。ま、重衡さま、重衡さま。厭です、そんな。妾は……妾は一年でも、二年でも、三年でも、いゝえ、いつまでもいつまでも斯うして、一生あなたさまのお傍にゐたうございますのに。

重　衡。戀は夢ではない、現實です。ごらん、私はこのとほり、生きた骸なのです。自由をもぎとられた、みぢめな虜人なのです。戀人にしあはせを與えることの出來ない、哀れな男なのです。

千手前。（熱烈に）あなたさまが、たとへ、生きた骸であらうと、みぢめな虜人であらうと、それが妾の戀に何の支障がございませう。また、妾は、あなたさまから、これ以上のしあはせを與えていたゞかうなどとは、夢にも考へたことはありません。

重　衡。——（思はず、千手前のうるんだ瞳に、視線を移す）

千手前。妾はたゞ、斯うして、あなたさまから、あたゝかいお情を受けて、朝夕放れず、いつまでもいつまでもお仕へしてゐることが出來れば、その外の望みは、何一つありませ

ん。それだけで、この妾は、女として生れてきた生甲斐以上の生甲斐を感じるのでございます。

重　衡。（眞面目に）千手どの。それほどまでに、あなたに想はれる價値が、この重衡のどこにあるのであらうか。――私はどうも、あなたの一刻の氣まぐれのやうな氣がしてならない。

千手前。――重衡さま。（間）あなたさまは、そんな氣でゐらつしやいましたの？

重　衡。いや、なに、しかし、それに、私は斯うしてゐても、いつ何時、斬られるか、流されるか、判らない。實に朝の白露にも似た身の上なのです。あなたは、それでも、そのたよりない露を愛しんで、さし昇るあの日輪にそむかうと言ふのですか。

千手前。重衡さま。もしあなたさまが、お斬られになるならば、その時は、妾はその場を去らず、自害して果てませう。

重　衡。なに！

千手前。また、あなたさまが、流刑になるならば、その島が、たとへ千里を隔つ離れ孤島であらうとも、妾は、きつとお跡を慕つてまゐります。

重　衡。おゝ、千手どの。あなたは、あなたは、それほどまでにこの重衡を――

千手前。妾は、主君頼朝から、あなたさまをお慰めにまゐれと、こゝへ差遣されて、お目にかゝつたその日その時から……われとわが心に、堅くさういひきかせたのです。

重　衡。――

千手前。重衡さま。妾はこのとほり誓言いたします。江柄、足柄、伊豆、箱根を始め奉り、日の下に住したまふ諸々の神の御名にかけて――千手は、重衡さまに、すべてを捧げます。

重　衡。千手どの！　あゝ、私は、あなたのその眞情に對して、何をもつて報ひたらいゝのか。（涙、頬を傳ふ）

千手前。（莞爾として）あなたさまの、その清らかな涙こそ。何物にも代へ難い尊い妾への賜物です

重　衡。私には今また、新たに、この世への未練の種が、一つ増えてしまつた！（狂ほしく）あゝ、死にたくない。このよろこびを得て、どうして死ねやう。生きたい、生きてゐ

たい。

（――榊葉、狩野介の侍女たちに手傳つて貰ひながら、琴を運んでくる）

千手前。重衡さま。榊葉たちがまゐります。（靜かに身を離れ、重衡の涙をやさしく拭いてやらうとしながら）でも、拭いてしまふには惜しい、その美しい涙。

重　衡。重衡が、戀のために、生れて始めて流した涙です。（そつと拭ひ、笑顔を作り）おゝ、榊葉。皆も、ご苦勞であつた。さあさあ、琴をこれへ。（侍女共に）おまへたちも、千手どののお手並を、聽いていつてはどうだ。

侍女甲。はい、有難うございます。でも……（と、他の侍女たちと顔見合はせる）

侍女乙。ご酒興のさまたげとなりましては……

重　衡。なに、そのやうな氣遣ひには及ばぬことだ。

榊　葉。さあ、こちらへ。

侍女丙。はい、あの……

榊　葉。お許しが出てをりますものを。さ、こちらへ。ご一緒に並んでうかゞひませう。

（その時、石金丸、おほあくびと共に、起き上る）

榊　葉。ホ、、、まあ、石金丸どのの、あの無作法なこと。

重　衡。ようやつと、眼が覺めたか、石金丸。

石金丸。なに、ちつとも眠つてはをりませんでした。

重　衡。なに？

千手前。（ほとんど同時に）まあ！

（重衡と千手前、呆れて、思はず顔見合はせる）

石金丸。しかし中將樣、千手さま、どらんなされませ。石金丸の眼にも、これ、このやうに、美しい涙が。はゝゝゝ。

重　衡。人のわるい老爺めが。

（榊葉、錦の袋より琴を出して、千手前の前へ。千手前、柱を立てゝ、靜かに彈き始める。重衡は、聽入りつゝ、しげ〳〵と千手前の顏をうち見遣りゐる。が、やがて、琴の曲進む內、重衡は悄然として階を降り、庭園へ出る。暫時、物想ひに沈みながら逍遙。間。泉水の前にたゝづんで、眞上の月を見上げる）

重　衡。（獨白）その曲は、普通には五章樂といふが……私の耳には、後生樂とこそ聽こえる。（琴の音調、急拍子に至つて益々絕妙、人々は醉ひたる如く聽き入つてゐる）美しい夜だ。何も彼もが、ほんたうに美しい夜だ。あゝ、不思議なほど、私の心は鎭つてきた。心の底にこびりついてゐた一切の醜い俗念が、ことごとく拭ひ去られてしまつたやうな、何とすがすがしい心持であらう。しかし、こゝにたゞ一つ、私はやはり死を怖れる。それは、千手のために。人生無上の哀しみが、あの美しく淸らかな魂を、濁し、狂はし叩き潰してしまひはせぬかと怖れて。あゝ……（うなだれて、動かず。長き間――）

――靜かに、幕――

大　詰

（一）

壽永四年六月。（前幕より約一ケ年の後である）

この時、源頼朝は、すでに朝敵平氏追討を完了し、都鄙平定の大業も着々としてその實をあげ、加えて、前內大臣平宗盛父子を追捕せるの賞として、從二位に叙せられ、そ

の威望は天下にあますところなく、旭日昇天の勢ひにある。

源　頼朝の屋形。

寢殿には、頼朝出座。

寢殿に引續く内侍は、障子をたて切つて上の間と下の間にしつらひ、上の間には高麗縁の疊を敷き、平家の虜藏人大夫親房を居据え、寢殿近くには、九郎判官義經が座についてゐる。

下の間には、北條時政、大江廣元、齋院次官親義、比企藤四郎能員、土肥次郎實平、伊勢三郎義盛、畠山庄司重忠を始めとして、諸國の長大名が、何れも威儀を正して、控えてゐる。

寢殿正面階下の庭前では、今判決を受けた美濃守則清、左衛門尉信康の二人が、しほしほとして、源家の郎黨の手によつて、彼方へ曳かれ去るところより、幕あく——

義　經。（藏人大夫親房に向ひ）あなたさまのお身柄は、この義經がご守護いたしまして、再び京洛へ上しまゐらせることになりました。さやうご承知下さいますやう。

親　房。——（硬く坐つたまゝ、僅かに頷いて見せる。が、京洛といふ言葉を聽くと、血氣を失つてゐた頰にやゝ紅味を取戻し、哀しげな眼元には、微かなよろこびの色さへ浮ぶ）

義　經。（下の間へ振返り）伊勢三郎義盛ゐるか。

義　盛。はい。（進み出て）これにをります。

義　經。藏人大夫親房卿、ご退出。ご休息の間へご案内いたしておくやうに。

義　盛。畏りましてございます。では、お立ちを——

（親房、頼朝と義經に一禮して立上り、無言のまゝ、義盛のあとへ續いて去る。間）

頼　朝。義經。

義　經。はい。

源平鎌倉記

頼　朝。（鋭く、低く）京洛へ上る途中で、あの男の頸を刎ねてしまふのだ。土地は、おまへの任意のところでよい。

義　經。……やつぱりさうだつたのですね。だが、兄さん。あの親房といふ人は、諸國に影をひそめて機會を狙つてゐる恩顧の殘黨を狩り集めて、平家復興の旗を擧げ得る力量も人望も、ある人ではありませんよ。命だけは、助けてやることにしたら、どうですか。

頼　朝。おれの考へに、餘計な口出しをするのは、控えろ。おまへは、萬事このおれの命ずるとほりやつてゐたら、それでいゝのだ。

義　經。——さうですか。では、可哀さうですが、小夜の中山の邊ででも、斬ることにしませう。

頼　朝。（不機嫌に）藤四郎。藤四郎。

（比企藤四郎能員、はつと應えて進み出る）

頼　朝。次は、誰だ。あと幾人殘つてゐる。

能　員。少々お待ちを。（書付を繰り）前内大臣宗盛樣、ご子息右衛門督清宗樣、それから、前三位中將重衡樣と、それだけでございます。それでおしまひでございます。

頼　朝。よし。

義　經。兄さん。また、餘計な口出しかも知れませんが、せめて宗盛卿とだけは、庭を隔てゝ御對面になつたらどうでせうか。

頼　朝。（憎々しげに見返り）なぜ。

義　經。宗盛卿は、假にも前内大臣。入道相國、小松重盛卿亡きあとの、平氏の總帥です。まさかに下位の虜と同じやうに、この疊の上へ引据えて、對面するといふ譯にはゆきますまい。

頼　朝。なんだ、そんなことなら、構はんぢやないか。位階なら、おれだつて今は二位だぞ。また宗盛殿が平氏の總帥なら、おれは源氏の頭領だ。しかも相手は、朝敵として追捕

された人間、おれは、それを追捕した者だ。そこへ引据えて對面するに、何の遠慮が要るものか。おい親義、一法昌寛に、宗盛殿父子をこれへと、傳へろ。

親　義。承知いたしましてございます。（急いで、去る）

義　經。（髯をひそめ）だが、兄さん。頼朝は結局東夷でしかない。武門の禮も心得ぬ男だなどと、蔭へ廻つて指を差されるやうなことになつては、京都への影響もどうかと思ふのですが。

頼　朝。東夷だと？　うは〳〵。おい義經！　おまへ、いつからそんな言葉を使ふやうになつた。なるほど。この鎌倉の地から一足も出ないでゐるおれとは違つて、おまへは、京の甘い空氣に觸れたり、公達の華美な生活を覗いたりして、曲りなりにも文明の光に浴してきた。そこで鎌倉へ歸つてきてみると、俄かにこのおれが、東夷に見え出してきたと言ふ譯だな。そして、おれのすることなすことが、野卑で見てはをられんのだらう。

義　經。兄さん！　あなたは、私のこととなると、どうしてさう變にからんでくるのですか。

私は、兄さんのためを思へばこそ、厭な思ひをしながらも、氣付いたことは言ふのです。——私に對して、色々と氣に入らないことがあつたりするからなのでせうが、それにしても私たちは、敵同志ぢやない。同じ血を分けた、かけがひのない兄弟ぢや有りませんか。兄さん。ねえ、兄さん！

頼　朝。今壇の浦合戰の跡始末をやつてゐる範頼からも、つひこの間、そんなことを言つて寄越したが、たとへ血肉を分けた兄弟であらうと、また眞の親子であらうと、うか〳〵と心を許せるものぢやない。それは言はなくとも、よく判つてゐる筈だ。

義　經。兄さんは、保元の亂、それから平治の亂の時の、お父さんやお祖父さんや伯父さんたちの、この世で最も醜い、最も不幸な、あの爭鬪のことを言つてゐるのですね。

頼　朝。源氏は代々呪はれてゐる。おれは時々さう思ふことがある。おれの家の系圖をみろ、父子兄弟相尅の血の跡で、汚れ切つてゐるぢやないか。

義　經。（周圍に氣を兼ね、言葉鋭く）兄さん！　口へ出してい〳〵ことと惡いことがありますぞ。

頼　朝。いやそれはおれの家系ばかりぢやない。人間といふものは、自分の慾望を充すために

は、どんな醜い眞似でも、平氣でやるものなのだ。

義　經。そこで、この私も、信用のならない奴だと言ふ譯ですか。

頼　朝。さう思はせるやうに、おまへはやつてゐる。さうでないとは言はさん。

義　經。すると兄さんは、あの陰險な梶原景時の讒言を、まだ根に持つてゐて、私がいつか差上げた百枚の起請文の方は、反古同然に見てゐるのですね。

頼　朝。えい、くど〳〵と煩い。默れ！

義　經。默りません！

頼　朝。なにッ？　後悔するなよ、この出過ぎ者奴が！

（內侍の下の間、さわめき立つ）

義　經。（無念さうに、涙さへ浮かべつゝ）私は、心外でならないのです。京洛から西國にと足かけ二年の間、この命を賭して軍にしたがつたのは、決して、自分の野望を遂げやうとか、自分の利益を得やうとかいふ、そんな下心を抱いてやつてゐたのではありませんぞ。一つには恐れ多くも、大君の御爲、また二つには源氏の名譽の爲、詰りは兄さんの爲、ひたむきに血みどろの合戰をしつゞけてきたのです。それを、かうして成果をあげて歸つてきてみれば、兄さんはよろこんで下さるどころか、私を、まるで敵のかたはれか何かのやうに、妙な眼で見てゐて、少しも打解けて下さらうとはしないではありませんか。私に、もしゆくべき故鄕があるならば、このまゝ、直ぐにでも身を隱してしまひたい氣持で、一杯です。

頼　朝。喋ることは、それだけか。だがおれは、それだけの言葉で、おまへを見直し、思ひ返し、信じるといふことは出來ないぞ。ふゝゝ。

義　經。では、どうしろと言ふのです。どうしたら兄さんには、私の心が判つてくれると言ふのです。

（この時、齋院次官親義の先導で、一法昌寛と、その他の侍臣が恭々しく附添ひ、平宗盛と、

その子清宗の二人がくる。宗盛は、始終おど〳〵そは〳〵と落着かぬ態度で見苦しい。それに反し、子の清宗は、僅かに十七歳の若年ではあるが、威風あたりを拂ひ、足どりもしづかに、設けの座に進む）

頼　朝。（威容を作り）前内大臣ご親子へ、頼朝、ご挨拶を申入れます。——嘗て、この頼朝は、故入道相國によつて、死罪を宥された大恩もあり、平家ご一門の方々に對しては、私の意趣は露ほどもありません。しかるに、叡慮には背き難く、勅諚に隨ひ奉り、追討の兵を催しましたが、今日圖らずも、こゝにご對面いたしますこそ、頼朝にとつて、思ひ寄らず有難くよろこびをります。（冷かな切口上でいふ）

宗　盛。——（おそれて應えられず、喉拂ひでごまかしながら、出來るだけ敬節の態度を示し、頼朝の意を迎えやうとするかのやうに、一々頷いて見せたりしてゐる）

清　宗。（從容として）わが平氏は、代々朝家を守護し奉り、その功勞によつて、祖父清盛に至つて太政大臣に昇り、左右の大將も、一門の内より出てをります次第ですが、この度身の誤はないとは言ひながら、朝敵のお咎を蒙りました上は、どうぞ一刻も早く、この頸を刎ねていたゞきたう存じます。

宗　盛。（不意を衝かれたやうに、狼狽し）これ〳〵、何を言ふ。血迷つたか、愚者奴。花の蕾のその命を、自ら散らしてくれと頼まうとか。おまへはまさか、心からそんな恐ろしいことをのぞんでゐる譯ではあるまいが。え？

清　宗。（涙ぐみ）お父さま。お父さま。あなたは默つてゐらして下さい。そんな恥しい戯言を敵將の前へきてまで、おめ〳〵と口へ出さないではゐられないのですか。どうか、默つてゐらして下さい。

宗　盛。こら。親に向つて、戯言とは何事だ。親の心、子知らずとは、おまへのことだぞ。（半ば頼朝へ聽かせる如く）誰だつて、命の惜しくない者はない筈。お前は若いから、こんな場所に出ると、氣が上ずつてしまふのも無理はないが、くだらない見榮や外聞にとらはれて、心にもない英雄的な虚言を、口から出任せに、無暗と喋り散らすものではない。この父に思はぬ迷惑をかけることにでもなつてみろ。末代までも不孝のそし

りは免れぬぞ。おまへこそ、默つて口を結んでをれ。萬事は、お情深い義經どのにお任せしておけばそれでよいのだ。義經どのは何と仰せあつた。自分の恩賞にかへてもわしら親子の命を、きつと申請けて下さると、鎌倉へくる途中、堅く約束して下さつたではないか。な、判つたか。

（事の意外に、下の間の大名席、さわめく。頼朝は、憤怒に充ちた鋭い一瞥を、俯いた義經の面上に注ぐが、何も言はず、そのまゝ、比企藤四郎能員へ顎をしやくる）

頼　朝。藤四郎。かねて申付けあるものを、前内大臣ど親子へお目にかける。これへ。

能　員。はつ。（急ぎ、下の間まで下り、彼方へ合圖する）

（言下に、二人の侍臣が、俎上に大魚と利刀を置いたのを持つて出て、それを宗盛父子の前へおき、引退る。宗盛、何のことやら判らず、不審氣に、頼朝と義經の顔を交互に見位べたり、俎上の大魚と利刀をキョロ〳〵と見廻したりする。清宗は、直ちにその意を悟り、無言の裡に暫時瞑目する。頼朝は、これも無言のまゝ、大きな眼で、宗盛父子を凝視してゐる。緊迫した空氣。間。やゝあつて——）

清　宗。（沈痛に）これは、どうか、お下げ下さい。

頼　朝。ふむ、すると、あなた方には其覺悟がつかないといふ譯ですな。（冷笑が面上を露骨に走る）

清　宗。つきません。けれど、心臆したからではないのです。私ひとりだつたら、勿論、よろこんでこのご好意を受け、せめて最期だけでも、潔く自害して面目を保たせていたゞきたいと思ひますが……父は自害などゝさうです、父には到底そんなことは、出來ません。

宗　盛。（驚き、俄かに蒼ざめ）清宗。ではこれは、自害しろとの謎であつたのか。

清　宗。先に壇の浦の亂戰の日、父は、味方の郎黨共から邪魔扱ひにされ、わざと船から突落されました。それを見て、私も時を移さず跡を追つて、海へとびこんだのですが、父は命を惜しんで沈み得ず、その内に、源氏方の熊手にかけられて、その船へすくひ上

げられてしまひました。私は、父があとに生残つては、その向後のほども覺束なく、どうしても一人父に先立つて死ぬ氣にはなりませんでしたので、恥を忍んで、父のすくひ上げられた船の近くへ泳ぎ寄り、同じ熊手にかき上げられて、虜となりました。（泣く）今更こゝで、どうして自害して死ねませう。どうか、やはり頸を刎ねることにして下さい。私は、父が頸を刎ねられたのをみてから、心おきなく、しづかに死んでゆきたいと思ひます。

（清宗のしほらしい心根に、思はず黄ひ泣きする大名の姿が、あつちこつちに見える。宗盛、今は子を叱る力も失せ、げつそりとしてうなだれてゐる）

頼　朝。（流石に愁然と頷き）床しいお心を承る。では、お望みに任してよいものかどうかとくと考へてみませう。それにしても、これ義經。

義　經。——はい。

頼　朝。ご親子のお身柄は、一應京洛へお上しまゐらせるやうに。

義　經。承知しました。

宗　盛。なに、京洛へ？（キヨトンとした顏付で茫然としてゐる。その次の瞬間には、とび上つてよろこび、疊からまろび出んばかりの態で）おゝ！　おゝ、では、死の刑は赦されますのか。わしら親子の命は、助かりますのか。やれ、有難い。こ、これよ清宗、清宗、お禮を。申せ。お禮を。お禮を。

清　宗。（無言）

頼　朝。畠山庄司重忠、あるか。

重　忠。はい。これに——（膝行して進む）

頼　朝。前内大臣ご親子、ご退出。ご休息の間へ。

重　忠。畏りましてございます。（宗盛父子へ）おそれながら、ご案内申上げます。どうぞ。

宗　盛。いや、ご苦勞ご苦勞。では清宗、失禮をしてな。（頼朝、義經を始め、わざ〳〵下の間の方へまで、ニコ〳〵しながら頭を下げたりして）これよ、さ、立て立て。京洛へ歸れるのだ

ぞ。あのなつかしい京洛へな。はゝゝゝ。

清　宗。――

（宗盛父子、重忠にともなはれて、去る。大名席は緊張を解かれ、口々に、低聲で今の宗盛父子の態度を噂し合つて、暫時どよめく）

頼　朝。時政殿。（北條時政を招き）どうだ、あの態は。

時　政。（苦笑して）何ともはや、お答えの仕様もありません。

廣　元。總帥があれでは、この度の追討がなかつたとしても、平氏は、遅かれ速かれ、没落したに違ひありません。

頼　朝。どつちにしろ、廣元。あの親子は、近江あたりで斬つてしまふがいゝ。そして頸は洛中へ持つてゆき、檢非違使の誰かに、渡してやるのだ。

廣　元。畏りましてございます。

頼　朝。義經。おまへには、氣の毒だが、さうすることにするぞ。

義　經。そんな皮肉を言はないで、何でも兄さんの思つたとほり、やつて下さい。

頼　朝。そしておれは、今後おまへを弟として扱はんつもりだ。序でに言つておく。

義　經。兄さん。

頼　朝。最早おまへが何と辯解しやうとも、おれの考へは變らない。

義　經。では、兄さんはどうしても、私が兄さんに叛心を抱いてゐて、ひそかに何かもくろんでゐると言ふのですね。

頼　朝。それでなくて、では何のために、宗盛父子の命を、自分の恩賞に代へてまで助けてやるなどと、そんな莫迦氣た約束をしたのだ。あの父子を助けると、おれの方から出る恩賞より、もつと〳〵莫大な恩賞が、どこからか出るとでも言ふのか。（おそろしい蔑のある哄笑）

義　經。さうです。天から私の心へ、無形の恩賞が。私は、その無形の恩賞こそ、日本全土を貰ふより、もつと大きい、もつと尊い恩賞だと思ひました。そして、それはまた、こ

の度の合戰で失はれていつた、幾萬幾十萬の生靈への、心ばかりの追善とも供養ともなると信じたのです。

頼朝。默れ。默れ。そんな世迷ひ言にこのおれが、騙されると思つてゐるのか。それにおまへは、虜つた平大納言時忠の娘をめとつたさうだな。おれは、ちやんと知つてゐるのだぞ。おまへは、代々家の敵であり、しかもこの度朝敵の汚名の元に虜つた平氏の一族と緣を組んで、その聟となり、その上、宗盛父子の命まで助けやうとしたのだ。みろ。その裏面に何か劃策するところがないと、どうして言へる。この頼朝に對して叛心は抱いてゐないと、どこを押したら、そんな空々しい音が出る。

義經。だが、兄さん、聽いて下さい。それには——

頼朝。えい、もう言ふな。貴樣のやうな奴と口をきくのも、腹が立つ！

（義經膝を進めて、更に物を言はうとする時、土肥次郎實平の先導で、狩野介宗茂が附添ひ、前三位中將平重衡出る。一同、水を打つたやうに、鎭まる）

頼朝。（氣輕く）おゝ、中將殿、見えられたな。

重衡。ご免を——（座につく）

頼朝。（機嫌よく）あなたとは、これで二度目の對面だ。

重衡。一年有餘になります。——長い間、虜の身にかゝはらず、意外にねんごろなおもてなしを蒙り、有難くお禮を申上げます。……おゝ、義經どのも在してか。（思はず、ホロリとして）おなつかしい。——京洛では、一方ならぬお情に預りました。

義經。恐れ入ります。

頼朝。しかし、中將殿。かうしてお會ひしてみると、元氣は去年と變らないが、大分おやつれになつたやうだ。

重衡。（寂しく笑つて）當然くるべき今日の日への、激しい毎日の心遣ひで。——そして、今日の日が、どうせくるなら一日も早くきてしまへばいゝのにと、待ち設けてゐたくせに、やはり昨夜は、心昂り、眼が冴えて眠られず、たうとう曉方まで、千手どのと語

り明かしてしまひました。

頼朝。（輕い嫉妬と共に）どうです、千手は。中々可愛い奴でしたらう、はゝゝ。千手は白川宿手越長者の娘で、先づ鎌倉一の女です。しかし、あなたの氣に入つていたゞいて、何よりでした。頼朝としても、心靈しの無駄でなかつたことを、よろこんでゐました。

重衡。——はい。

頼朝。時に、中將殿。この度長きにわたつた合戰も、やうよう終を告げ、平氏御一門の方々の處置についても、段々と定りましたので、あなたへの決定も、こゝにお達し出來る運びになつた次第です。

重衡。そして、それは？（ちらりと頼朝を上目づかひに見上げ、おそろしさうに直ぐ眼を伏せて、次の言葉を待つ）

頼朝。あなたのお身柄は、南都大衆の手へ移すこととなりました。

重衡。南都大衆の手へ。（間。がつくりとなる）——さうですか。南都大衆の手へ。あゝ、やはり、私が内心怖れ危んでゐたとほり、一ばん責苦の多い道が選ばれた。最惡の刑罰が與えられた。

頼朝。頼朝としても、それは決して本意ではないのです。しかしあなたは、單に武門の上の虜といふより、かの興福寺東大寺炎上の當面の責任者であり、最も罪深い宗門の敵であるため、南都大衆の意見、陳情を、無下に退ける譯にいかなかつたのです。あなたには、まことにお氣の毒に堪えないが、罰は、罪の據つて來るところにしたがつて定めなくてはなりませんから。

重衡。（暫時無言の後、涙を拂つて）源平兩家は昔より、我朝牛角の將軍として、帝位を守護し奉り、互に浪藉を誡めて、國土の安定を計つてきました。しかるにこの重衡、一谷の合戰に虜られて、この恥辱を蒙る。——昨日は人の上、今日はわが身に懸るこそ、先世の宿業、怨憎の果てぬところとでも申しませうか、尙この上、南都の衆徒の手に渡されて、恥辱の上に恥辱を塗重ねるは、冥土にあつて、七日七日に十王の手に渡される哀しみにも倍增しての苦しみです。

頼朝。——

重衡。捕はれの身で、言葉を返したり、また自分の意志を通す自由は持たない人間ですが……この上のご芳恩には、惜しからぬ命ではありますが、出家して、南都炎上の罪業消滅を願ひ、また一つには、戰沒した人々の後生をも弔ひたく思ひますが、曲げて私の剃髪をお宥し願へませんか。

頼朝。そのことは、前にも申上げておいたやうに、あなたは私闘の虜ではないのですから、頼朝の一存では、計ひかねることなのです。それに、すでにかうして、あなたの處置も決つてしまつてゐるのですし。

重衡。こんなことを言へる身の上ではありませんが……では、どうでせう。京洛の御所へ、お許しを仰いではいたゞけませんでせうか。

頼朝。な、なに？

重衡。（熱心に）院はきつと、私の心のほどをお憐み下さつて、出家をお許し下さることと思ふのですが。

頼朝。（ムッとなり）ではあなたは、この鎌倉の處置では不服だと言はれるのか。

重衡。いや、決して！　そんなことはありません。私はたゞ、この命が……いや、命は惜しくはないが、出家したいばかりにさう申したのです。おすがり申す。おすがり申す。どうか重衡に、剃髪の儀を、出家のお許しを……

頼朝。頼朝は、今まで、あなたに對して、出來るだけの好意は盡してきたつもりです。

重衡。さうです。それはよく判つてゐます。有難いと思つてゐます。そこで私は、も一つ、こゝでご好意にすがりたいのです。

頼朝。そのために、私の今までの好意を踏みにぢることになり、また私の威信が人々に輕んじられることになるのも顧ず、自分の不當な希望を押通したいといふのか。頼朝の處置を受入れず、京へお許しを願つてくれといふのか。

重衡。私は忘恩の徒ではありません。さう言詰められてしまふと、二の句が繼げなくなつてしまふが、重衡が最後のたゞ一つのこれが我儘なのです、さう思つて――。おゝ、義經どの。（這ひ出て、確と手をとり）兄君にお願ひして下さい。どうか、重衡の出家を、お願ひして下さい。

源平鎌倉記

義　經。――

重　衡。（義經と頼朝へ交互に）おすがり申す。おすがり申す。重衡、頭を下げて、このやうにお願ひするのです。ひたすら、たゞひたすらに、おすがり申す。

頼　朝。お斷りする。その儀は、絶對にかなひません。

義　經。（重衡を座に押戻しやりつゝ、低聲で）中將樣。あなた樣の背後にをります諸大名の内には、その昔、あなた樣ど一門の旗の下にゐて、ご恩を蒙つてゐた人々もをります。お鎖りなさいますやう。お鎖りなさいますやう。

重　衡。私は今、乘るか反るかの境目にある人間です。そんな見榮を考へてはゐられません。義經どの、どうか、あなたからも願つて下さい。もし出家が、どうしても許されないのなら……（ちょつと言ひ澁るが、思ひ切つたやうに）遠島でもよい。

義　經。え？（流石に驚いて、重衡を見詰める）

重　衡。遠島でよい。さうだ。どんな國の果の果の、離れ孤島へ流されてもいとはぬ。義經どの、願つて下さい。遠島でもよい。

頼　朝。中將殿。あなたは、この期に及んで、心が亂れたのか。

重　衡。いや、正氣です。このとほり、正氣です！

頼　朝。（憤然と）正氣なら、恥知らずの、大莫迦者だ！

（一同、さはめく）

重　衡。（何事も耳に入らぬ有樣で）たとへ、何と言はれてもよい。このとほり、おすがり申す。

頼　朝。幾百萬邊言はれるとも、一旦決めた處置を變更することなどは出來ぬ。（土肥次郎實平を招き）實平。實平。中將殿、ご退出だ。お伴れ申せ。

實　平。はい。（進み出る）

重　衡。では、では、どうあつても、駄目ですか。

頼　朝。最早お答の限りでない。實平、早く休息所へ、ご案内しろ。

實平。中將殿、お立ち下さいますやう。

重衡。――私の亡父清盛は、横暴で、自我一點ばりの男でした。長兄重盛が、そのことばかり苦に病んで、死んでいつたくらひでした。それでも、物の哀れといふことは、亡父は知つてゐたやうです。武士の情といふことは心得てゐたやうです。助けてはやれない人間をも、亡父は情をかけ、ずひぶん骨を折つて命を救つてやつたこともありました。――たとへば、長兄や祖母の口添えがあつたにせよ、亡父は殺すべきあなたを、殺さずに、伊豆に流すに止めたではありませんか。

頼朝。それが、どうしたと言ふのだ。それが、何だといふのだ。あなたは、何を言はうとしてゐるのだ。あなたは、この頼朝が、物の哀れも武門の情も知らぬ野蠻人だと言ふのか。それとも、おれはおまへを助命してやつた恩人の子供なのだ。だからおまへは、義理にもおれの願ひを容れるのが、當然ぢやないか、と、さう言ひたいのか。

重衡。待つて下さい。それは違ふ。私は、そんな意味で言つたのではない。あなたは今、どんなことでも、心のまゝになる地位に在るのだ。あなたが一つ口をひらいて下さればとぶ首さへ無事につなげておくことも出來る實權を持つてゐるのだ、とさういふつもりで言つたのです。

頼朝。あなたの處置については、すでに京へも申上げ、その上で許可の官符もくだされてゐることなのだ。それを、みだりにおのが權力をたのんで、再び改變のお願ひを出すなど、上をおそれざるの仕方。出來ることか出來ないことか、考へてみても判る筈だ。あなたも、いやしくも前平大將軍ぢやないか。大將軍なら大將軍らしく、もつと潔く振舞つたら、どうだ。おい實平、實平、何をまご〳〵してゐる。この大將軍を早くあちらへお伴れ申せ。

實平。はい。はい。さ、中將樣、どうぞ、お立ちを――

重衡。――（今は、物言ふ氣力も失せ、茫然として首うなだれてゐる）

頼朝。うは〳〵、大將軍は腰が抜けて、立たぬと見えたぞ。實平、遠慮なく、肩をお貸し申せ。お助けして、早くあちらへゆけ。

實平。はい。

源平鎌倉記

（土肥次郎實平、任方なく、重衡を抱きかゝへるやうにして、人々の騒ぎ立つ中を、伴れ去つてゆく）

頼　朝。（その背へ浮びせかけるやうに）いやはや、宗盛といひ重衡といひ、平氏の奴原は揃ひも揃つて、青史に汚名をとどめるためにこの世へ出てきたやうな奴ばかりだ。うは〳〵。あの態をみろ。あの態をみるがいゝ。うは〳〵、うは〳〵。（扇で膝を叩いて笑ひ續ける）おい義經、どうだ。文明もいゝ。だがそれに溺れ切つた奴は、末はみなあのとほりの態になるのだ。義經。おまへは、このおれが上洛しないでゐる眞の理由が判つたか。おれは、文明の魅力を怖れるのだ。京の甘い風が、このおれの心の内へしみこんでくることが、一ばん怖ろしいのだ。

（義經、何事か打案じつゝ、默念とさし俯いてゐる）

――暗轉――

（二）

源　頼朝の屋形、南御門前。

鎧姿も嚴しく扮つた侍たちが多勢、門の内外にたむろして、出發の合圖を待つてゐる。門内より、時々、馬のいなゝきなど聽こえる。

門の兩翼は築墻長く繼き、その築墻の彼方此方には、虜られし平家の人々の出發を見やうものと、集つてきた人々が群をなし、押合ひ、凹合ひしながら騒ぎ立つてゐて、警固の侍に叱られたり、薙刀の柄で押戻されたりしてゐる。また、子供の手を拔けるほどにぐい〳〵ひつぱつて走つてくる女、老人を背負つて、汗を拭き拭き駈けつけてくる若者などと、後から後から、見物に集つてくる人々は、引きも切らぬ有樣である。

鍛冶師風の男。はてさて、たうとうお陽樣が頭の眞上まできてしまつた。いつになつたら、出發するのだらう。

巫女風の若い女。細工人態の男。ほんたうにねえ。私はもう、兩脚がまるで二本の棒のやうになつてしまひましたよ。だが、花の京洛の御所深くお仕えしてゐたお公家衆を、たとへ平家の虜とは言ひながら、私たち下々の者が、かう七て、つひ日と鼻の先に見ることが出來るなんざあ、滅多にある譯のもんぢやないぜ、お巫女さん。疲れたぐらひは我慢しなさいな。

漁夫らしい若者。さうともさ。おいらなんぞは、大切な稼業を一日休んで、わざ〳〵七里ケ濱から、見物にやつてきたんだ。

警固の侍一。（振向いて）こらこら、ちつと靜かにしろ。この炎天の下で、それでなくても頭がボツとしてゐるのに、耳のうしろで、さうひつきりなしにペチヤクチヤとやられては、一層のぼせ上つちまふ。喋るなら、默つて喋れ。

山　伏。退け退け退け退け。（後方から群衆を掻き分け掻き分け進み出る）おれを、もそつと前の方へ出せ。うむ、よし、こゝならよく見えさうだ。いや、時に、そこな警固のお侍。長い間續いてゐた戰亂もやうよう納り、これでどうやら、落着くところへ落着いたといふ形ですな。

警固の侍二。（煩ささうに）まあ、さうだ。

山　伏。いや、何よりです。これからは、源氏の御世だ。白旗の御世だ。下萬民の血と汗の結晶を、遠慮會釋もあらばこそ、おどしづくで取立て取立て、自分たちは懷手をして、くる日もくる日も贅澤三昧、酒と歌と女に現を拔かして暮してきた、平家のおごりは久しからず、たうとう今日といふ日がやつてきたのだ。それをいゝ手本に、ぐつと心を引緊めて、前者のわだちは踏まぬ用心、どうか、淸く、明るく、正しく、おたのみ申しますぞ。

（周圍の人々、わつと歡聲をあげる。手を叩く者、足を踏み鳴らす者、褒める者などもあり）

白拍子甲。それはさうと、ねえ、あなた。三位中將重衡さまと仰有る方は、まるで繪に描いたやうに、美しい方ださうですね。

白拍子乙。一目見てごらんなさい。（聲をひそめ）そんじよそこらの將武者たちの相手より外出來

ない妾たちの身が、つく〳〵情なくなりますよ。

白拍子丙。（憧れの表情で）まあ、そんなに美しい方なのでせうか。あなた、ではごらんになつたことがあるのですね。

白拍子乙。今朝方、中將さまが、多勢の侍たちに左右を護られて、お馬でこゝへいらつしやるのを、若宮大路の道角で、近々と拜みました。

白拍子甲。まあ、憎らしい。なぜ妾も誘つては下さいませんでしたの。

白拍子乙。だつて、その時は、ゆきずりにうまく出會つたといふだけですもの。あなた方をお誘ひにゆく間なんかないぢやありませんか。

白拍子丙。ホゝゝゝ。

博勞風の男。やい〳〵、先刻から默つて聽いてゐりや、何を愚にもつかねえことを、キイ〳〵喋り立てゝゐやがるんだ。やかましくてなりやしねえ、靜かにしろい。お前らといふ人間は、男の噂以外には、話の種がねえとみえるな。え？　糞いめえましいぢやねえか。

白拍子甲。おゝ厭だ。大きなお世話ぢやないの。

白拍子丙。この人、他人のことまで妬いてるのね。

（その周圍の群衆、思はずどつと笑ひ崩れる。博勞風の男、相手が女では喧嘩も出來ず、てれくささうに押默り、首を延ばして、しきりに門内の方を眺めたりなどしてゐる）

市女笠の老女。もし〳〵前のお方、ちよつとおたづね申します。

繪師風の老人。（振向いて）はいはい、何でございますね。

市女笠の老女。虜られて、鎌倉へ伴れてこられた平家の方々の中には、何でも、熊手大臣とやらいふ平家で一ばん偉い位のお方も、まさつてゐらつしやるのださうですね。

繪師風の老人。熊手大臣。はあはあ、なるほど。（笑つて）それはね、お婆さん。內大臣宗盛樣のことなのですよ。つまり、宗盛樣が、壇の浦の船合戰の時に、海に落ちたのを、源氏方の熊手に掻き上げられて虜られたのですよ。そこで世の人々が、宗盛樣に熊手大臣とあだ名をつけた譯です。

法　師。（横から）これはご老人、あなたは、中々に博識家ですな。では愚僧も一つうかゞばうが、この度、源氏はつひに平氏を滅して世の實權を握り申したが、さてこれが、つまりだ、この太平が、いつまで續くものでせうかな。

繪師風の老人。え？（蒼くなり）こ、これは滅相な。そんなことを大聲で、あなた。

（その周圍の人々も驚き呆れて、若くたくましい法師の方を、ぢろ〳〵と迂散臭さうにかへりみる）

法　師。だが、これで平氏は、完全に滅びてしまふのだなどと考へてゐると、それは、大きな間違ひだぞ。平氏は一朝一夕に興つた成上りの家柄ではない。祖平高望以來、連綿として續いてきた傳統の力がある。その力は、根强く諸國の地下にはびこつてゐるのだ。そして、それは恰度、青草の芽のやうに、再びめぐり來るべき春を待ちながら、ひそかに、復讐の刃を研いでゐるのだといふことを忘れるな。

警固の侍。三（ギョッとして振り向き）こらッ。妖しいことを吐かす奴。貴樣、何者だ！（走り寄って、法師の肩を掴む）

法　師。（振り放し）皆聽け。騙されるな。賴朝は口に善政を叫びながら、その蔭では何をしてゐる。京洛では今、平氏に血のつながりを持つ者と見れば、まだ西も東も判らぬやうな幼い子供たちまで、しらみつぶしに探し出してきては、次々に無慘な殺し方をしてゐるのだ。畢竟、平氏の再興を怖れての所爲とは言へ、鬼畜に等しい暴逆ではないか。さう思はぬか。

警固の侍。三　汝、默れ。默れ。默らぬか。（小突廻し）貴樣さては、平家ゆかりの者だな。

法　師。わしか。はゝ。わしは、平氏の怨靈だ。おまへら源氏を呪ひ滅すために、地獄の底から這入つてきた平氏の怨靈だ。

警固の侍。三（氣味惡くなり）おい、誰か手をかしてくれ。早く、手をかしてくれ。怪しい奴を捕えたのだ。

（他の場所にゐた警固の侍が二三人、「何だ何だ」「その坊主が、どうかしたのか」などと、口々に叫び立てながら、走つてくる）

法　師。源氏の奴原は、外道ぞろひだ。頼朝は悪鬼の王だ。魔道の將だ。汝ら、甘やかされるな。心をゆるすな。血を吸られぬやう、用心しろ。そして、いゝか。源氏の命脈は、人の恨みだけでも、決して長くは續かぬぞ。三代とは保たぬぞ。はゝゝ、わはゝゝ。

（驚られ、突かれ、それに反抗しつゝ、曳かれ去る）

（群衆、物怪にとりつかれたやうな表情で、聲なくそれを見送る。――やがて、門内より、出發合圖の貝の音、高らかに響き渡る。鎧姿の侍たち、一時に門内へ吸ひこまれてゆく。警固の侍たちも緊張し、通行の道筋へ油斷なく眼を配る）

（間もなく、先手として北條時政、乘馬にて一門の郎黨をしたがへて、肅々として、南御門より出る。次いで大江廣元同じく乘馬にて、手の者に、美濃守則清、左衞門尉信康以下、十數名の捕虜を守らせて續く。この捕虜、何れも悄然と首うなだれ、徒歩でゆく。群衆喚きつゝ見送る。續いては藏人大夫親房、三人の輿丁に擔がれた板輿にのせられ、畠山庄司重忠とその部下に守られて進む。群衆の中から、傍を通過する板輿の内を覗かうとする幾人かが、警固の侍に押戻されその附近なだれを打つ。次に總帥宗盛父子、特に網代車に同車を許され、伊勢三郎義盛の護りを受けて續く。父子共に淨衣姿、右衞門督清宗は恥氣に袖で顔を覆つて上げないでゐるが、宗盛の方は、簾を卷き上げてある物見から、キョロ〳〵と往來を、如何にも、もの珍しいといつた顔付で眺め廻したりしてゐる）

繪師風の老人。（低聲で）そら〳〵出てきた。あれですよ、お婆さん。あれが、熊手大臣です。

市女笠の老女。どれどれ。（延び上り延び上り）おゝ、あのお車の。――なむあみだぶつ〳〵。（手を合はせて、伏し拜む）

（宗盛父子の網代車に續いて、前三位中將平重衡が、舍人石金丸が轡を取る馬に乘せられて出る。馬の左右には南都の衆徒が三人づつ、徒歩にて、いづれも嚴しい面付押並べて、默々として附添ひ、更にこれを、土肥次郎實平一黨の手で守る。行列の殿りは源九郎判官義經、馬上ゆたかに進む。群衆、再びざはめき立つ。特に若い女の一團の間には、一段と華かな騷聲が湧き上る。馬上にうなだれて、蒼白く憔悴し切つた重衡に幻滅を感じる者、却つて、殿りの義經の凛々しさに見とれる者などもあり）

山　伏。（重衡が前を通り過ぎる時、聲高に罵つて、人々を驚かす）平重衡。汝生きながら、又々京洛へ曳かれて、恥を故郷に曝さうとするか。南都炎上の佛罰その身に報ひきたつたものとは言へ、何とみぢめなその姿よ。わはゝゝゝ、わはゝゝゝ。（義經の郎黨の一人に胸を衝かれて蹌く。見物の幼童その下となり、激しく泣く）

（その少し以前より、千手前、侍女榊葉に援けられ、心忙しく駈付けて、群衆の最前列へ出る。

過ぎてゆく板輿、網代車――そして、重衡の馬、前へ近づく）

千手前。おゝ、重衡さま！（榊葉の手を振向つて、走り寄る）重衡さま。千手です。千手でございます。（泣く）

重　衡。――千手どのか。（暗然として）やはり何も彼も駄目だつた。隨分がんばつてはみたが……最後のたのみの綱も、すげなく斷ち切られ、たうとう、かうして、南都へ移されることになりました。

千手前。――（激しく吸り上げる）

（行列は停る。群衆波立つ。網代車の物見からは、宗盛眼を圓くして、その有樣を眺めてゐる）

千手前。重衡さま。かねてから、今日の日のくるのを、覺悟をしてはをりましたけれど……今かうして目の前に、あなたさまのお情ないお姿を見なくてはならない妾は、妾は……

重　衡。千手どの。もう何も言はないで下さい。これが私の運命なのだ。そして、あなたの運命なのだ。哀しいかな、人間には、運命に抗し得る力は與えられてはゐないのです。私は、知りました。私は、ほんたうにすべてを諦めました。

千手前。重衡さま！

重　衡。雪の朝、花の夕……想へば、この鎌倉の一年も、嬉しいにつけ哀しいにつけ、隨分と長かつたが。千手どの。あなたには、別して手厚いお世話になりました。それに、何一つ報ゆることもなく去つてゆくことばかりが、心殘りです。

千手前。重衡さま。何を仰有います。妾は、あなたさまから、そんなご挨拶を受けたくはありません。妾はあなたさまに、お約束いたしました筈です。それを、お忘れになつたのでせうか。なぜ、一緒にといと言つては下さいません。なぜ、一緒に死ねとは言つて下さいません。妾は、堅くお約束いたしました筈です。

重　衡。覺えてゐます。今も耳の底に殘つて。しかし……

千手前。妾はどこまでも、あなたさまのお供をしてゆくつもりです。どこまでも。どこまでも

（この時、郎黨の一人、行列の進行が、餘り長く滯滯することを怖れて、千手前にあはたゞしく注意する。群衆、何か譯の判らぬ喚聲をあげて、騒ぎ立てゝゐる。その騒ぎの内に、行列、進み始める）

千手前。（義經の前へ走り寄り）義經さま。お願ひでございます。どうぞ妾をお伴れ下さいまし。重衡さまのお供をしてゆくことを、お許し下さいまし。お願ひでございます。（後の言葉、群衆の喚聲にかき消されて聽こえず）

義　經。千手どの。あなたの心のほどは、義經深くお察しします。だが、あなたを一行に加えてゆくことは、それは出來ません。

千手前。判ります。でも、そこを曲げてのお情にすがりたうございます。（義經の馬の進むのに平行して跟いて歩きながら）どうぞ、妾の心を哀れと思召して。義經さま、お願ひでございます。お願ひでございます。

榊　葉。（はら〳〵しながら、千手前に跟いて歩きつゝ）もし、千手さま。それでは、お約束が違ひます。たゞ行列を拜み、蔭ながら中將さまをお見送りするだけだと仰有つたではございませんか。それに、このやうなことが、お屋形さまのお耳に入りましたら、どうなさるおつもりなのでございます。もし、千手さま。

千手前。いゝえ、そんなことは、どうだつて構はない。お放し。お放し。そこを放しておくれつたら。（榊葉を突放し、義經へ追付く）義經さま。どうぞ、お情でございます。妾を、お伴れ下さいまし。

義　經。お氣の毒ながら、何度仰有つても、お斷りするより外はありません。——私には、そんな權限は與えられてゐないのです。

千手前。でもあなたさまは、お屋形さまとは、ご兄弟ではありませんか。多寡が女一人、お供の列にお加え下さつても、まさかにお兄さまからお咎めもございますまいに。

義　經。そなたは、何も知らないのだ。……どうか、そんなに私を困らせないで下さい。

重　衡。（振向いて、しきりに千手前を呼ぶ）

千手前。重衡さま。（走り戻つて、手にすがり、よゝと泣く）あなたさまのこれから長い旅先の、驛から驛への寂しい朝夕を、誰がおなぐさめいたしませう。誰がお身の廻りの世話をいたしませう。誰が諸共にあの世へまで、あなたさまのお供をいたしませう。あゝ妾は思つても胸が張裂けるばかりです。妾は、妾は、一體どうしたらいゝのでせう。

重　衡。千手どの。そのお心が、何よりの私への餞別だ。——あなたは、まだ若い。そして、美しい。自由と、明るさと、幸福に滿ちた前途を、私のやうな捨てられた人間のために捨てゝはいけないのです。

千手前。重衡さま！　あなたさまは——

重　衡。聽いて下さい。千手どの。あなたのお心に甘えるやうだが、この上は重衡、あなたに最後のお願ひが、一つある。きいてくれませうか。

千手前。きくもきかぬもありません。あなたさまのためならば、この命も惜しくない妾です。どうぞ、仰有つて下さいまし。早く、仰有つて下さいまし。

重　衡。千手どの。私には、しあはせと言はうか、ふしあはせと言はうか、一人の子供もあり

ません。私が南都へ曳かれて果てたなら、誰が、心をこめて、後生を弔つてくれるでせう。お願ひと言ふのは、このことなのです。あなたは、どうかこの世に永らへてゐて、私の命が露と消えたと風のたよりにでも聽いたなら、一本の香花なりと手向けて下さい。そして、長く私の菩提を弔つて下さい。

千手前。……

重　衡。では、千手どの。名殘りは惜しいが……これで。（確と千手前の手を握り、はら〳〵と落涙する）

千手前。重衡さま。……判りました。お供することは、諦めませう。これから先、たゞ一人生永らへてゆくことは、死ぬよりも、もつと辛いことではありますけれど、あなたさまの後生をお助けまゐらせますために！（泣く）

重　衡。かたじけない。よくぞ聞分けて下された。あゝ、これで、この世に思ひ殘すことはない。私は、心しづかに死出の旅路へのぼることが出來る。千手どの、さらば——

（千手前、應へなく泣き沈む。暫時。いきなり懐劍を取出す。そして、人々があつと思ふ間もなく、見事な黒髪を根元からぶつつりと切る。榊葉、驚いて、へタ〳〵と地へ坐つてしまふ）

千手前。重衡さま！　重衡さま！　お待ち下さいまし。これを。これを——（花道まで、こけつ轉びつ走り追ひ）これを。これを。

重　衡。（愕然となり）おゝ、あなたは！　あなたは髪を！

千手前。その黒髪に、妾の心を籠めました。重衡さま。重衡さま。どうぞ、しつかりと抱きしめて、どこまでも、どこまでも、伴れていつてやつて下さいまし。

（重衡、聲なく、千手前の黒髪を、愛しいものへするやうに、たゞしつかりと頰へ押當てたまゝ、涙にくれながら、ゆく。千手前、つひに地に伏して泣き入る。群衆のざはめきは、その頂點に達し、感極まつて貰ひ泣きをする女たちの姿が、人波にもまれ、あるひはまた、怒り喚きつゝ重衡や、千手前めがけて、石つぶてを投げる者などもあり。その時、門内より警固の侍が數人、

走つてくる）

警固の侍。（權高に）千手どの。殿のお召ですぞ。お立ちなさい。お立ちなさい。

警固の侍甲乙。行列を亂す不心得者、さう〳〵引立てこいとのお怒りだ。さ、どされ。お立ちなさい。

（警固の侍たち、千手前を左右より抱え上げるやうにして、引立てにかゝる。榊葉、爲すところを知らず、たゞうろ〳〵するのみ）

千手前。（引立てられながら）重衡さま。重衡さま。あゝ、もうあんなところへ……。重衡さま、重衡さま、千手は、お屋形さまから、どんなお咎めを蒙らうとも、怖れはしません。哀しみもしません。千手の魂は、あなたさまの胸に、ひしと抱かれてゆきました。これで、滿足です。滿足でございます。

（千手前、つひに門内へ引込まる。突然、貝の音。これは山伏が吹き立てたのである）

山伏。わはゝゝ、わはゝゝ、いや、流石に三位中將重衡は、一代の風流兒だ。武士の心を得ることは出來なくても、あれ見よ、美しい女の心だけは、しつかと掴んで去きをつたぞ。わはゝゝゝ。うはゝゝゝ。（青空高く貝を向けて、つゞけさまに吹き鳴らし、尙も亦笑ひ續ける）

――群衆の喧騒の裡に、幕――

柳亭種彦

（三幕）

序幕　鶴屋喜右衛門方、見世先
同じく、奥座敷

二幕目　組頭永井五右衛門屋敷
上野廣小路附近
遠山左衛門尉屋敷

大詰　柳亭種彦の住居

柳亭種彦

登場人物

柳亭種彦
歌川國貞
笠亭仙果
四方梅彦
鶴屋喜右衛門
よしや左兵衛
遠山左衛門尉
永井五右衛門

――その他、重要ならざる人物、多勢。

序幕

【その一】

日本橋通油町、地本問屋、鶴屋喜右衛門方見世先。

鶴の紋印に仙鶴堂と書いた軒下の招牌が目立つ。更にその横には、修紫田舎源氏三十八編下冊、柳亭種彦作　歌川國貞畫と書いた、厚味五分板の掛けかんばんが、婚禮雛形鴛鴦物語、山東京山作　歌川國貞畫、金澤萬八笑增談　松竹園秀山作　五雲亭貞秀畫の二枚のものと並べて釣り下げてある。

新版の草紙類を山と背負つた糶の男が、見世にたてこんでゐる客の間を、縫ふやうにしては、卸しに出てゆく。丁稚や番頭たちは、後から後から、ひつきりなしに詰めかけてくる客を相手に、聲を涸らしながら、大童で立働いてゐる。

柳亭種彦

――天保十三年の、春のことである。

（同業者、馬喰町のよしや左兵衛、丁稚を供に、訪ねてくる）

左兵衛。えゝ、ご免下さいまし。

老番頭。（奥まった帳場格子の内から、客の頭越しにそれと見て）おや、これはよしやの旦那で。さ、どうぞ。どうぞ、こちらへお入りなさいまし。

左兵衛。ご免下さいまし。いや、いつもながらご繁昌で結構ですね。

老番頭。いえ、もう。へゝゝゝ。さ、さ、どうぞ。

左兵衛。有難う。（帳場脇の上り框に腰をおろしながら）時に、こちらの旦那は、おいでですかね？

老番頭。はい。

左兵衛。ちと、お話いたしたいことがあるんですが……

老番頭。はい、はい。では少々お待ち下さいまし。（急いで、立つ）

左兵衛。お忙しいところ、恐れ入りますね。

老番頭。いえ、どう仕りまして。

（老番頭、鶴の紋を大きく染め抜いた暖簾をくゞつて、奥へ入る。左兵衛は伴れてきた丁稚を、客の邪魔にならぬやう、土間の隅へ寄せ、茶を運んできた鶴屋の丁稚には、一言二言お愛想を言ひ、客の出入を眺めなどしながら、待つ）

隱居風の客。（番頭相手に）柳亭種彦の田舍源氏は、一世を風靡した形ぢやな。紙價ために高まり、鶴屋ために黄金の倉を建つ、か。さうぢやらう。あはゝゝゝ。

番頭甲。これはどうも、へゝゝ、恐れ入りました。

隱居風の客。しかし、去年の秋……ぢやつたな、作者柳亭が病で倒れた時は、こりやもう、田舍源氏は後編が續くまいといふ噂で、江戸中の女子が膽をひやしたさうな。

番頭甲。はい／＼、でもごひいき様といふものは有難いもので、あの頃は、毎日多勢のお客様方が引きも切らず、手前方へ、種彦先生のその後のご容態をおたづねにいらして下さつたものでございました。

女房風の客。（横合から）その時に、大奥の松恵様といふお女中が、堀之内のお祖師様へ七日の間、柳亭病氣本復の願をおかけになつたつてんで、一時はまあ、大へんな騒ぎでしたちやありませんか。

若旦那風の客。左様、左様。床屋へ行つても、風呂屋へ行つても、その話で持切りでしたよ。

（奥より、老番頭先にたち、亭主喜右衛門出る。老番頭は帳場へ戻る）

喜右衛門。これは／＼、よしやさん。いらつしやいまし。

左兵衛。や、どうも。（慌てゝ腰をあげ）お忙しい最中を、わざ／＼お呼び立ていたしまして。

喜右衛門。ま、どうです。奥へお通り下さいませんか。と申しても、今丁稚たちが表紙がけをやつてゐて、ちらかつてはをりますが。

左兵衛。いえ、さうしてもをられません。これから、まだあなた、村田屋さんと丸屋さんとへ廻らなくてはなりませんので、勝手ながら、こゝで端折つてお話してまゐります。

喜右衛門。さうですか。して、そのお話と仰有るのは？（坐る）

左兵衛。實は、あなたもご承知の通り、去年の九月十月の、あの寢耳に水のお手入れですが、いやもう版元泣かせな（と聲を落とし）あれ以來、すつかりおぢけがついちまつて、手も足も出なくなつてしまひましたよ。

喜右衛門。（腕を組んだまゝ、無言）

左兵衛。敵討ものか、教訓もの以外、戯作類は何によらず、一切上梓御法度といふのですからね、あなた。それぢやあ地本問屋は、何で當りを狙つたらいゝのやら。ま、當りは二の次としても、敵討もの、教訓もの、の作者と言つても限りのあることですしね。

喜右衛門。——（頷き頷き、聽き入る）

左兵衛。そこで、背に腹はかへられませんからね、こゝはどうでも、問屋一同手を携えて、我

々が倒産しない範圍内だけ手をゆるめて頂くやうに、お上へ陳情しやうといふのです。

喜右衛門。なるほど。それは結構です。是非さうしたいですな。いや、さうしなくてはならぬところです。

左兵衛。でしよ？　で、それについちやあ鶴屋さんと蔦屋さんとには、どうしても先へ立つて乘出して頂かないことには、どうもなりませんので、それで、ま、仲間と相談の上、かうしてお願ひに上つたやうな譯です。

喜右衛門。それは〳〵。しかし、私共でお役に立ち得るかどうか判りませんが……で、蔦屋さんには、もうお話なすつたんですか、そのことを。

左兵衛。いえ、蔦屋さんには、あなたからお話願つた方がいゝと思ひましてね、西村さんや岩戸屋さんもさう申すものですから。

喜右衛門。ふむ。ふむ。（頷きつゝ）したが、岩戸屋さんといへば、あの人も、誠にどうも、とんだお氣の毒なことをいたしましたな。

左兵衛。へえ。（暗然となりつゝ）と言ふのが、元來が氣の小さな男ですからね。それに前々から、相當無理算段をしてやつてきたところへ、あの九月二十七日に、突然あなた、お奉行所からドヤ〳〵と踏込んできて、やつとの思ひで仕込をすました新春の新版ものを、版木諸共あらひざらひ荷車に積んで持つていかれてしまつたんです。そこで喜三郎さん、一時にカアッと血が頭へのぼつてしまひましてね。

喜右衛門。だが、この頃は、少しは腦の具合も快くなつたのでせうかね。

左兵衛。（首を振つて）いえ、それがね、いまだに時々變なことを口走りますよ。――おまけに、お上からはその後、ウンともスンともお達しがないのださうです。だもんで、おかみさんなんか、「これぢや、恰で蛇の半殺しみたいなものだ。かうなつたら、過料だらうが、缺所だらうが、何だらうが構やしないから、一時も早く罪科を決めて貰はなくては、とてもたまらない」と、泣いてばかりをります。

喜右衛門。――（大きく歎息を洩らす）

左兵衛。ま、さう言つたやうな譯合ですから、是非ひとつ、手を組んで下さいまし。

喜右衛門。承知いたしました。何れ、蔦屋さんともよく相談して、何とかいゝ方法を考へませう。